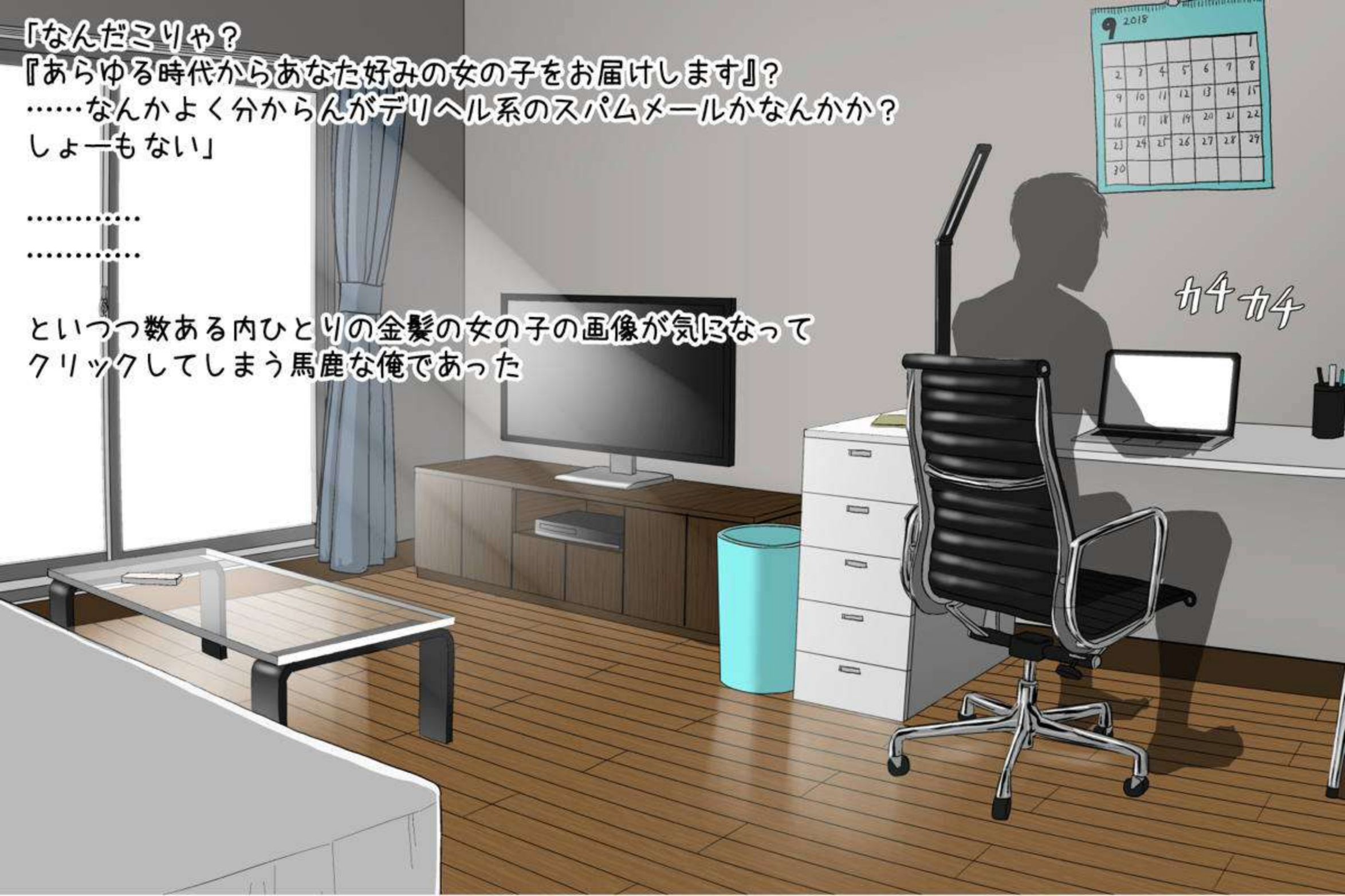
CAUSTICA
コースティカ
PRESENTS
CG集
女騎士王
召喚デリヘル

ある日届いた一通のメール、それが全ての始まりだった

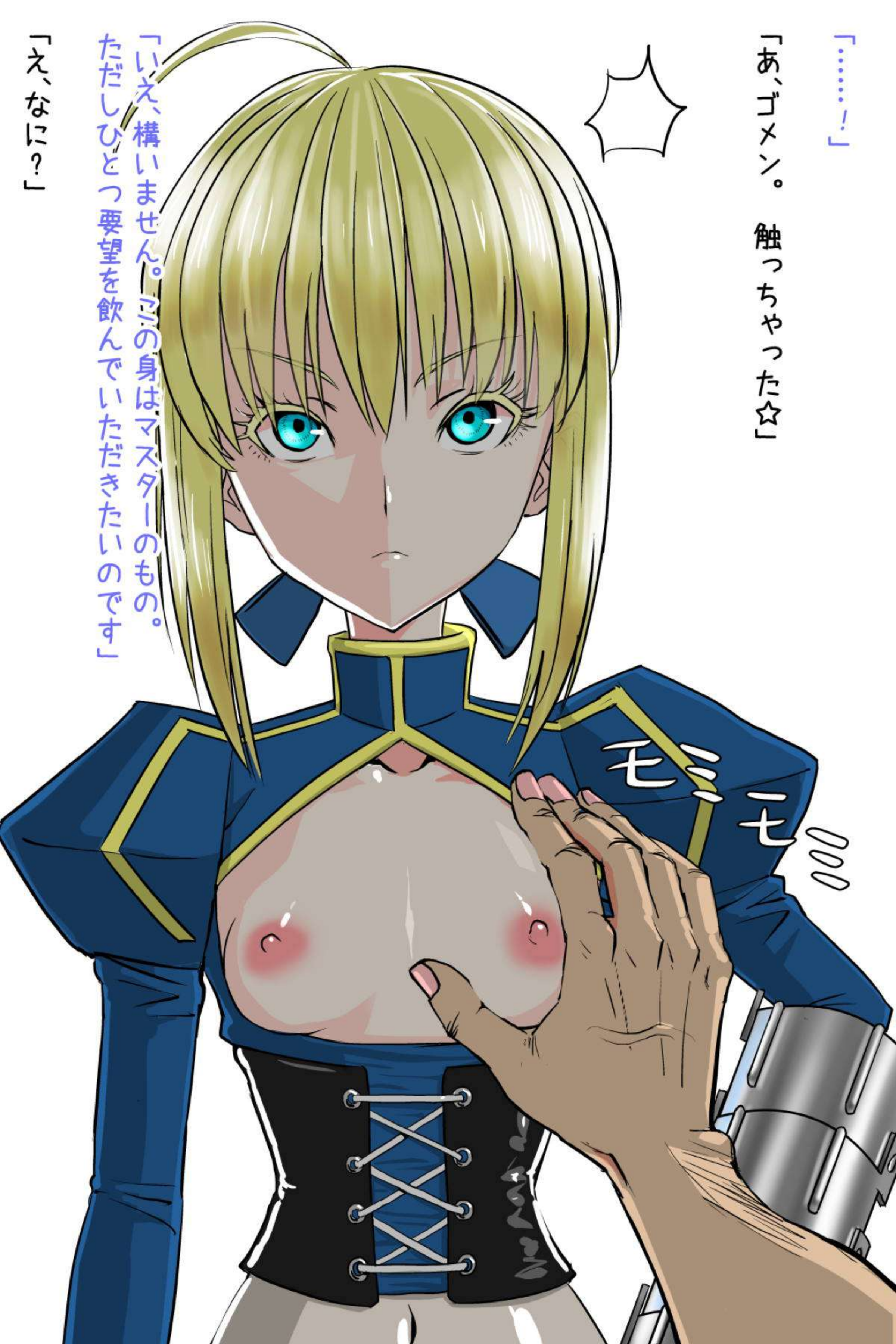

「なんだこりゃ？
『あらゆる時代からあなた好みの女の子をお届けします』？
……なんかよく分からんがデリヘル系のスパムメールかなんかか？
しょーもない」
……
……
といつつ数ある内ひとりの金髪の女の子の画像が気になって
クリックしてしまう馬鹿な俺であった
カチカチ

「…あれぇ！ 電源切れたよ？ 起動できない！
ウイルス？ 馬鹿じゃん俺…はぁ……」
ピカー

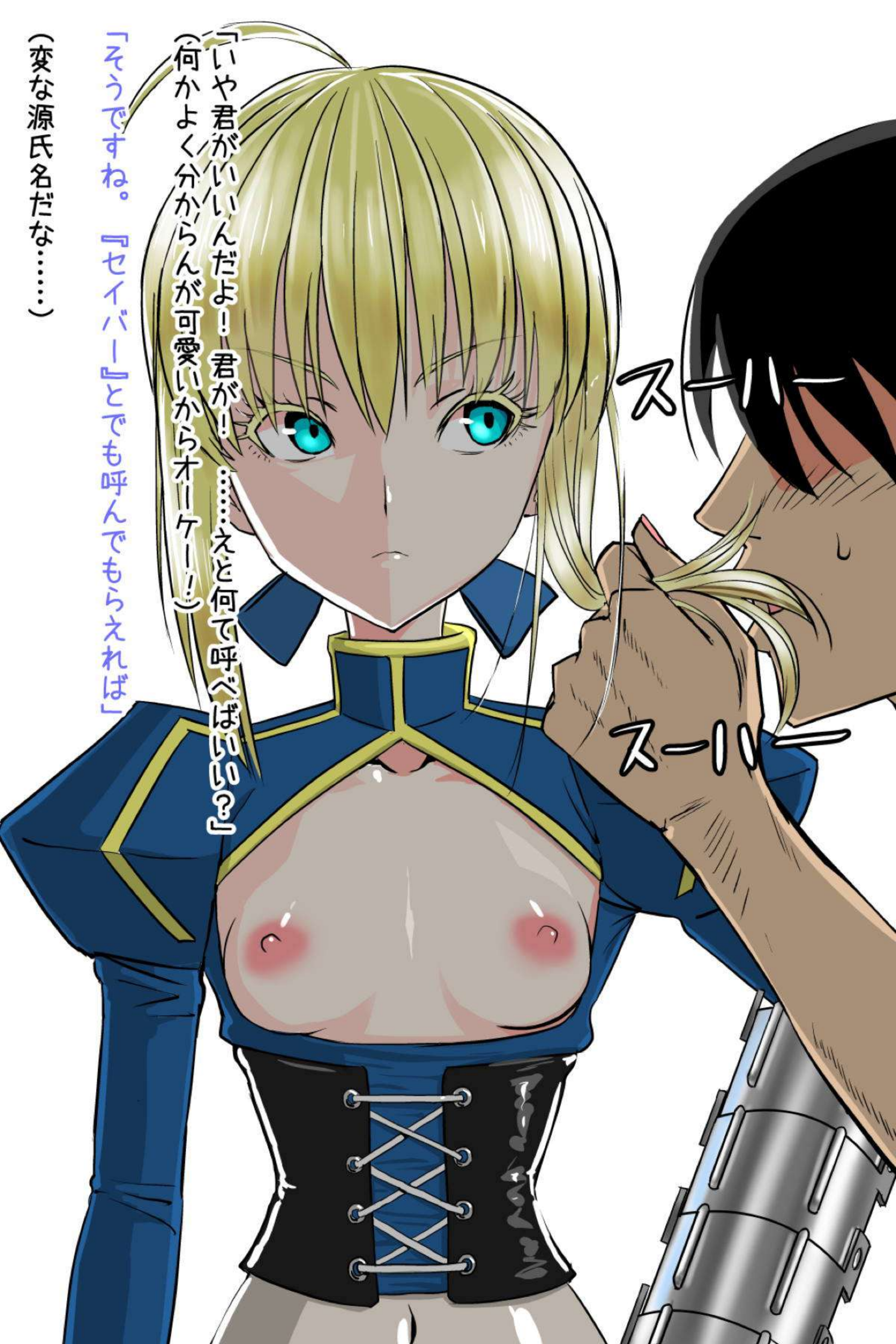
「うわあああああ！？　なんじゃあああああ！！」

……
……
「――――問おう。貴方が、私のマスターか」
「……う…」
「……？」
「うおおおおおおおおおおお！！！」

（今さっき画像で見た娘が目の前に!?）
「あの……貴方がマスターでよろしいですか？」
「ん？　マスター？　俺客……いやそうですマスターです!!」
画像より実物の方が遥かに可愛いパターンは初めてだ!
どうやっていきなり出現したか知らんが俺はこの夢のような現実を
即座に受け入れることにする！　そう！　俺はマスターだ!!


「……！」
「あ、ゴメン。触っちゃった☆」
「いえ、構いません。この身はマスターのもの。ただしひとつ要望を飲んでいただきたいのです」
「え、なに？」
モミモミ

「あなたのザーメンが欲しい」
「はい？」
「私の願いの成就のために高い魔力のザーメンが必要なのですあなたは選ばれた、そうですね？」
（選ばれたってあのメール？なにこれ営業トークの一環かなんかなの？）
「むろんその代償として貴方に私の体を捧げましょう今まで王として男として生きてきた私で良ければ、ですが」
プ
プ
プ
プ
プ


「いや君がいいんだよ！　君が！　……えと何て呼べばいい？」
（何かよく分からんが可愛いからオーケー！）
「そうですね。『セイバー』とでも呼んでもらえれば」
（変な源氏名だな……）
スーハー
スーハー

「ところでセイバーの願いって何？」
「話せば長くなりますが……つまるところ我が国が滅びたことをなかったことにしてもう一度やり直すことですね」
「ふーん」
（何その設定……
あっ、コスプレデリヘルだからシチュにもこだわるんだね！）
「しかし時間を巻き戻すような本来不可能なことを為すためには”聖杯”という超霊的存在の力を借りる必要があるのです」

ペロ
ペロ
ペロ
「ただ聖杯それ自体は単なる装置に過ぎずエネルギー源が
別途必要なのです
そのために選ばれたのがマスター、貴方です……聞いてますか？」
「うん聞いてる聞いてる！(嘘)」
「ただその肝心の聖杯が――――」

?
?
ビクッ
ビクッ
んッ♥
んんッ♥

「って、何をしているのですか！！」
「え？　クンニだけど？」
「ク、クンニ……？」
「まあ俺のことはいいから話してよ
えーと何の話してたっけ？」

「でっ、ですから、んッ♡　聖杯を起動するためにッ
マ、マスターのっ♡　ザーメンが必要、なのです、ん♡」
フル
フル

「セイバーは結構モリマンなんだね」

「も……もりまん？」

「モッコリ土手高だけど男として生きてきたなら
むしろ好都合なのかな？」

「なッ！？　いくらマスターと言えど許しませんよッ！」

カー

プニプニ

「許さないだって？　マスターに対してその口の聞き方はなんだ？」
「も、申し訳ありませんッ♡　でもマスター、そ、そこはダメですッ！
お願いしますぅ♡　お、おかしくなりゅう♡」
ビクッ
ビクッ
グラ
グラ

「そこってクリトリスのこと？　押せばいいの？　スイッチＯＮ！」
「ちょっ！　誰もそんなこと言ってなッ♡　おッ押さにゃいでェ♡
なんでグリグリするのですかああ！？♡」
？
♡
お♡
ぐぅぅ
ぐぅぅ

「あ、そっか！　吸ったほうが良かった？
ごめんね、気が利かなくて！」
「ちっ、違――――」
じゅうううう
ずっずー
じゅるるる
ビクッ
んおッ
ん♡
お♡
ビクン
んおお♡

「あーおいしかった、ごちそうさまでした」
「……」
ハー
ハー
ハー

「ところで聖杯ってなんだっけ？」

「やっぱりちゃんと聞いていないではないですか！」

「いやいやウソウソ、ちゃんと聞いてたよ
俺のザーメンがエネルギー源とかどうとかだよね(笑)
で、その聖杯ってどこにあるの？」

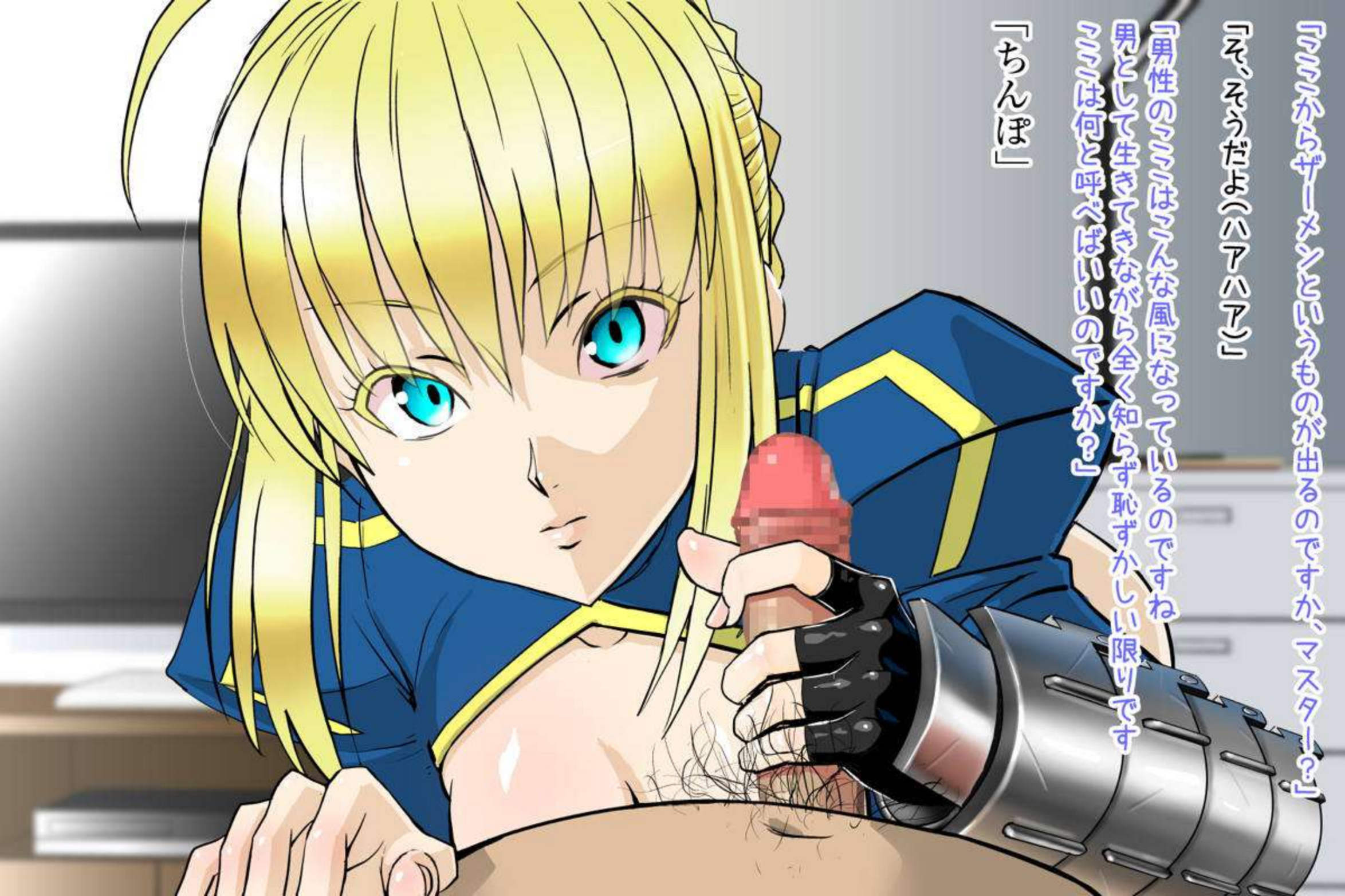
「聖杯と契約した私がその代理になります」

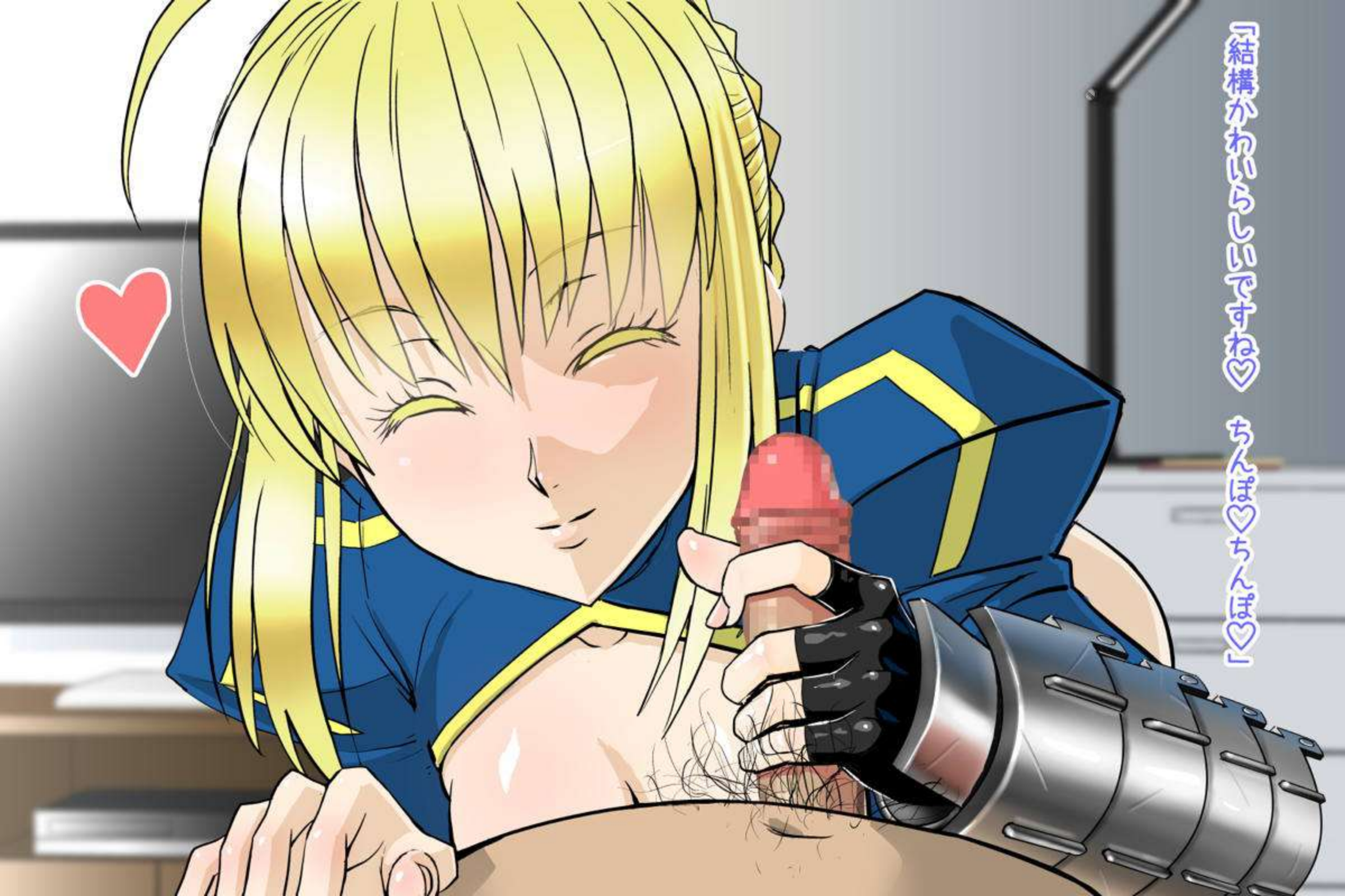
(なんかよくわからん設定にこだわってるけど
要は私にエロいことしてもいいよってことね)

「ところでマスター、ひとつ聞いてよろしいでしょうか？」

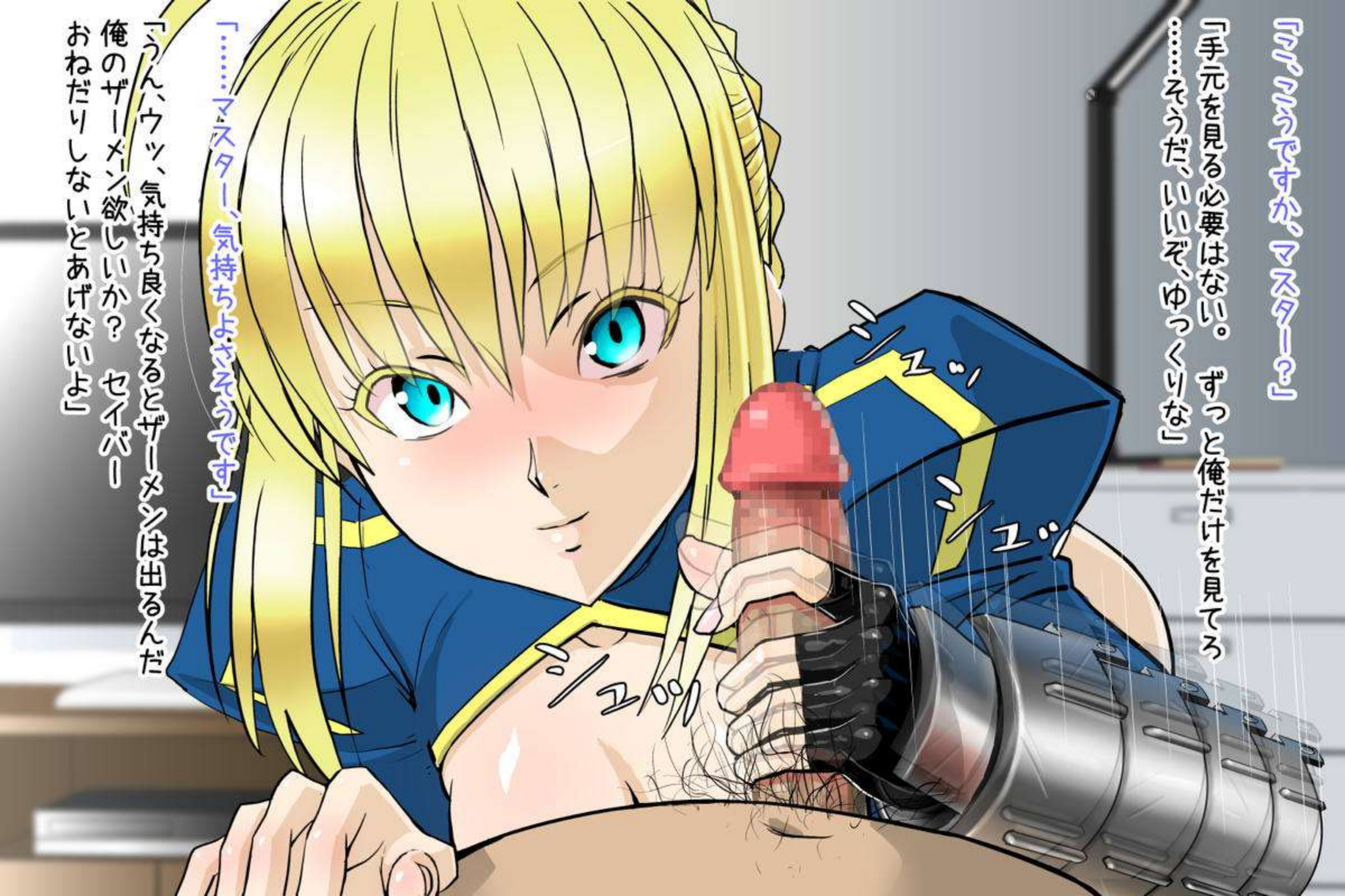
「なに？」

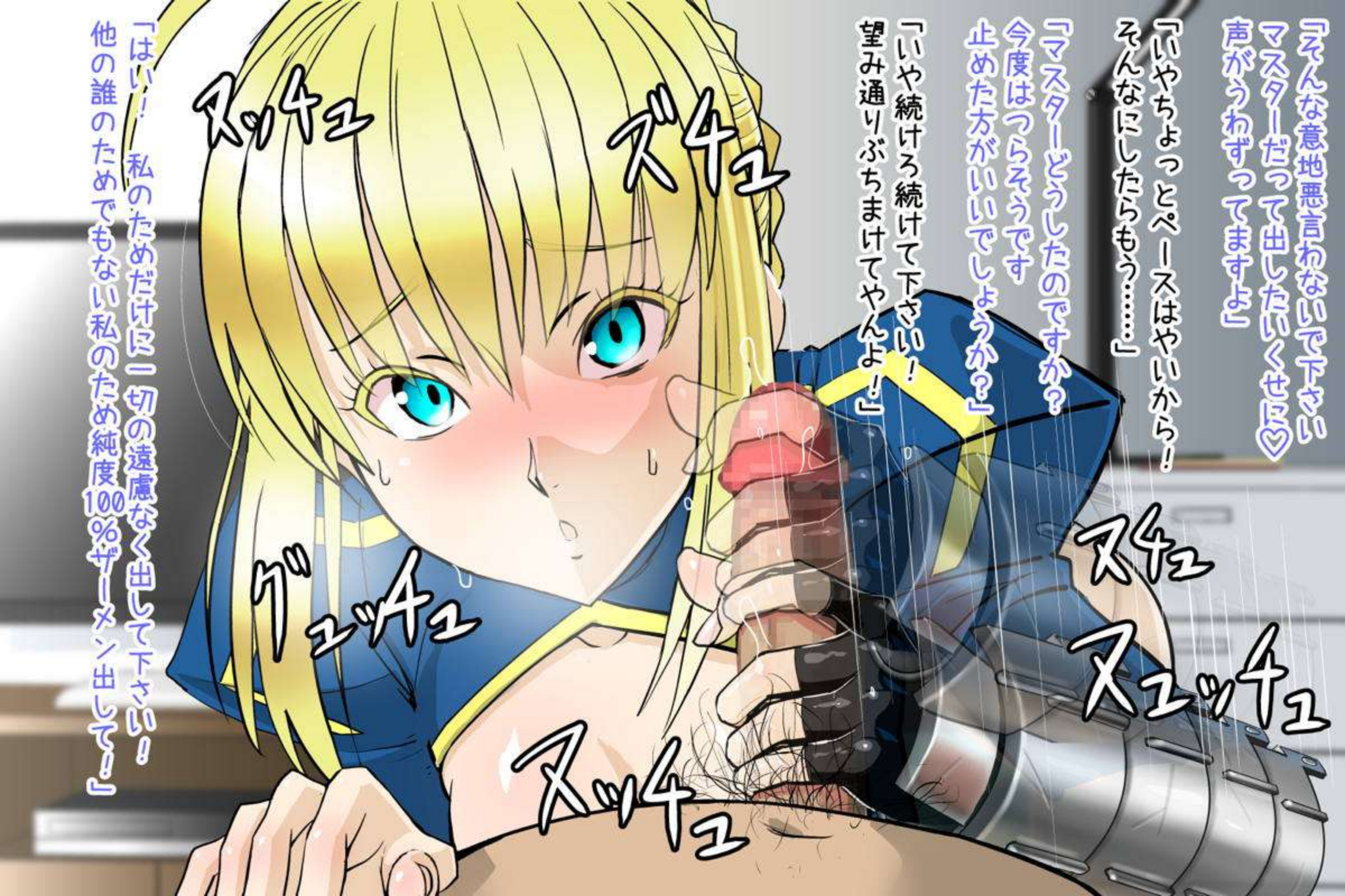
「ザーメンとは一体なんですか？」

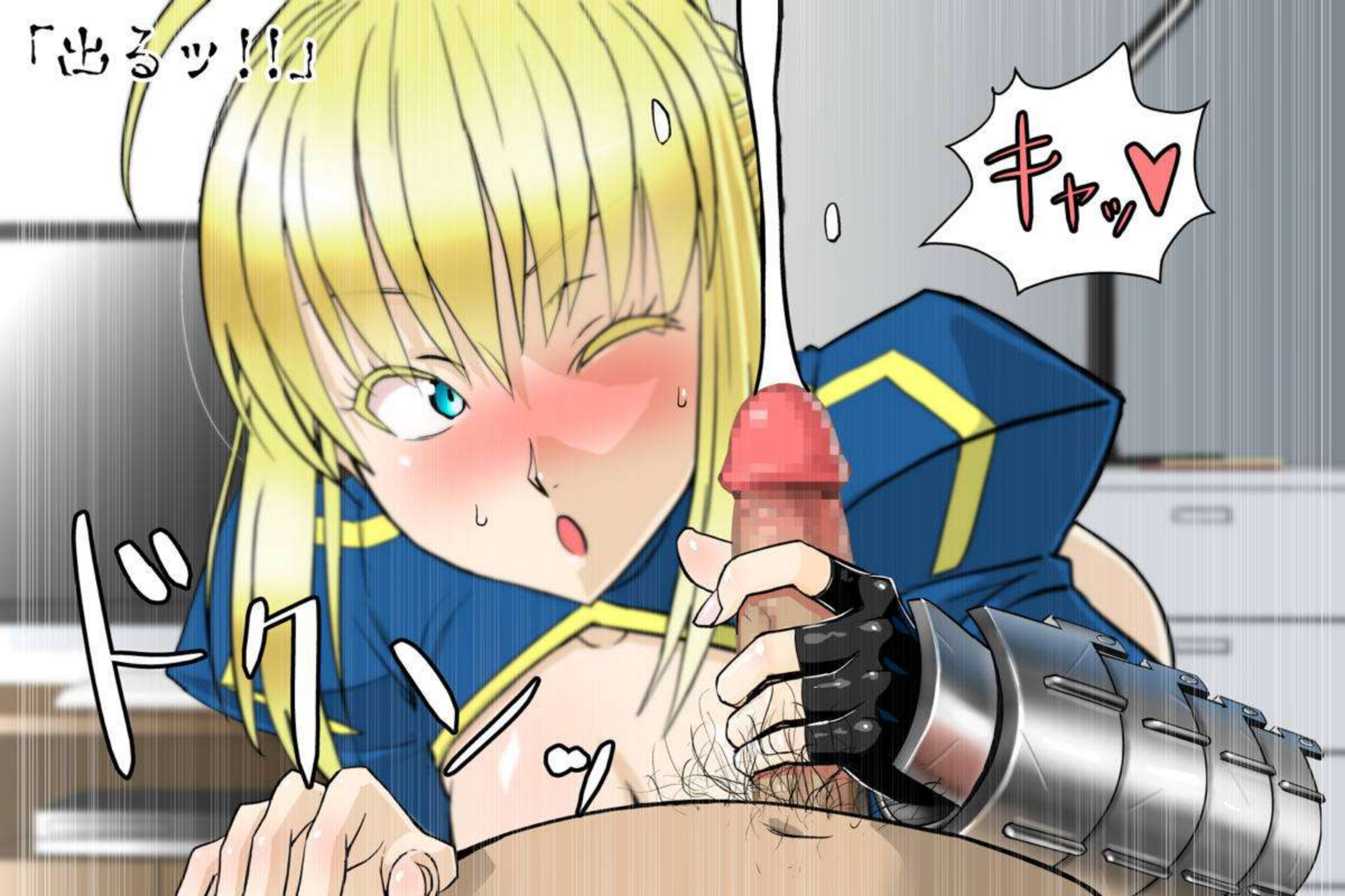

「ここからザーメンというものが出るのですか、マスター？」
「そ、そうだよ（ハアハア）」
「男性のここはこんな風になっているのですね
男として生きてきながら全く知らず恥ずかしい限りです
ここは何と呼べばいいのですか？」
「ちんぽ」


「結構かわいらしいですね♡　ちんぽ♡ちんぽ♡」

ビクッ
ムク
ムク
「ちょっ、なぜいきなり大きくなったのですか？
マ、マスター！　大丈夫なのですかコレ？」
「恐れ入ったよセイバー。今のは完全に不意を付かれちまった」
「はい？」
「何でもない。はやくこするんだセイバー！　上下に動かして！」


『ここですか、マスター？』
「手元を見る必要はない。ずっと俺だけを見てろ
……そうだ、いいぞ、ゆっくりな」
「……マスター、気持ちよさそうです」
「うん、ウッ、気持ち良くなるとザーメンは出るんだ
俺のザーメン欲しいか？　セイバー
おねだりしないとあげないよ」
ジュッ
ジュッ
ジュッ


「そんな意地悪言わないで下さい
マスターだって出したいくせに♡
声がうわずってますよ」
「いやちょっとペースはやいから！
そんなにしたらもう……」
「マスターどうしたのですか？
今度はつらそうです
止めた方がいいでしょうか？」
「いや続けろ続けて下さい！
望み通りぶちまけてやんよ！」
「はい！ 私のためだけに一切の遠慮なく出して下さい！
他の誰のためでもない私のため純度100%ザーメン出して！」
ズチュ
ズチュ
グチュッチュ
ズチュッチュ
ズチュ
ズチュ

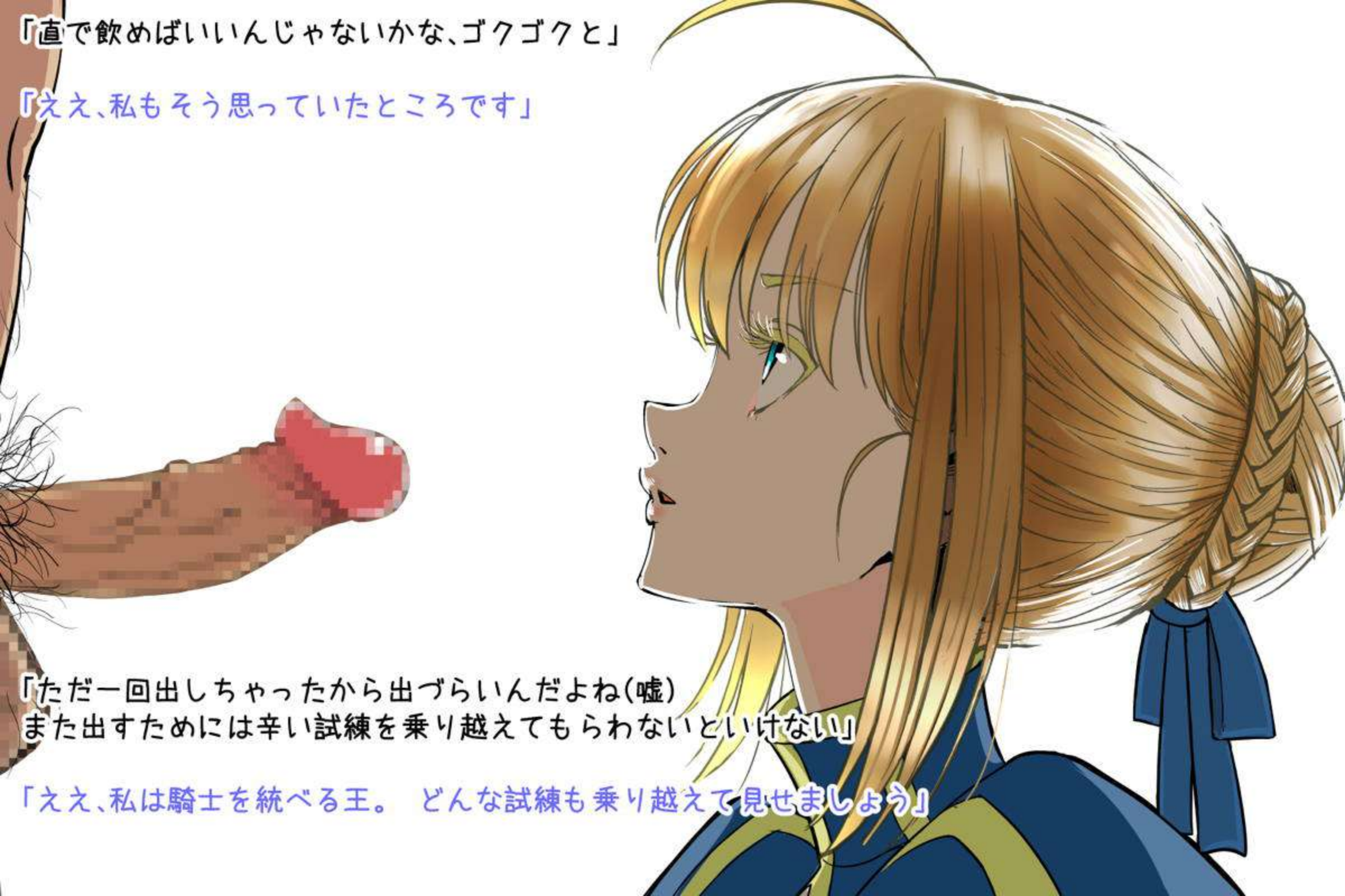

「出るッ!!」
キャッ♥
ドクン

『これがザーメン……確かに濃厚な魔力の香りがします
やはり貴方で間違いなかった』
『ハッ、ハァッ、ハァッ』
『マスター、このくっさいのがもっと欲しい
もっとたくさん出してください♡』
ぬちゃあ
『ど、どこから？　どこから出してほしい？』
「ちんぽ」

「フオオッ！！」
やんッ♥
ドピュッ

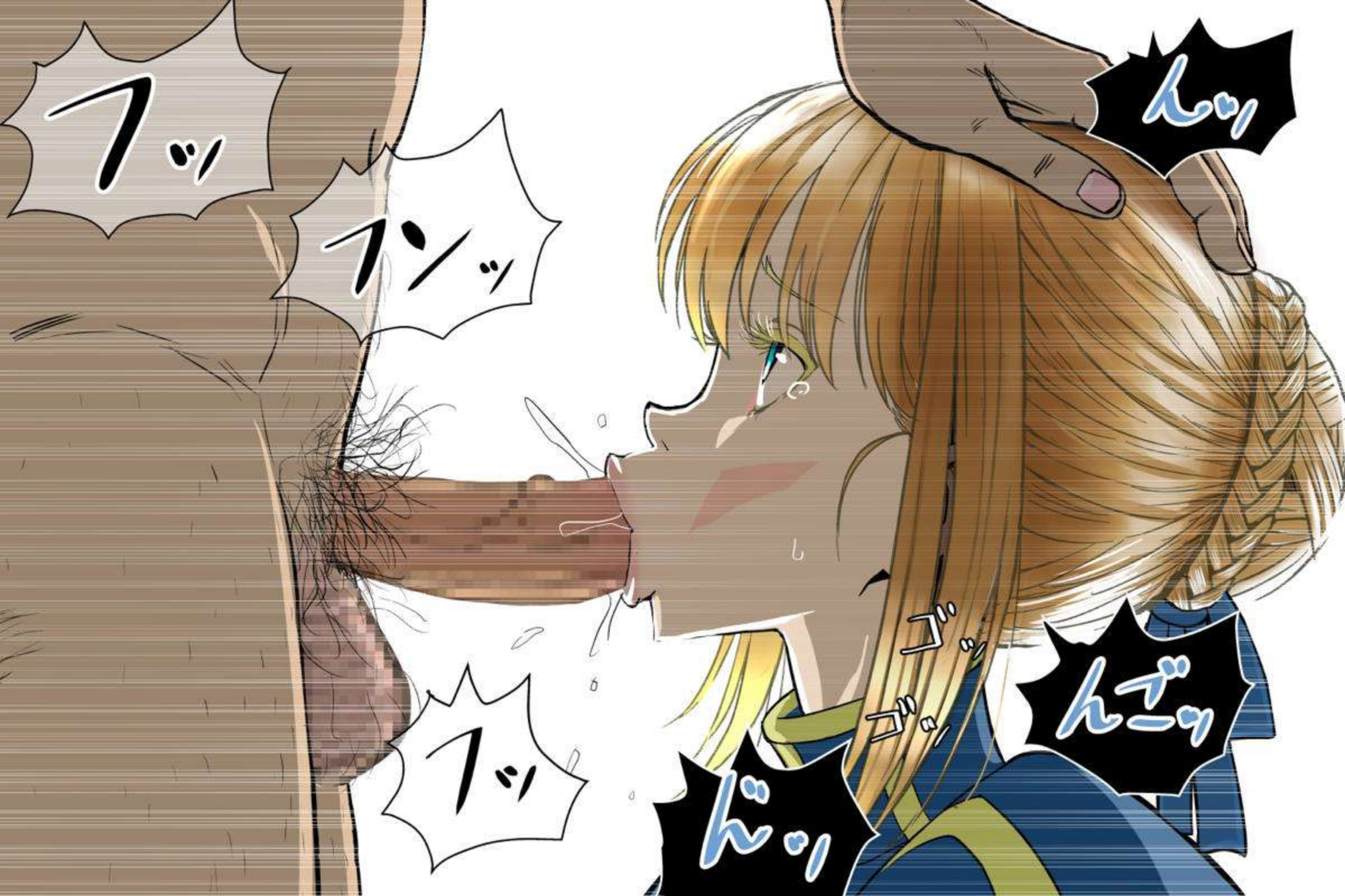
どちゅ
ぎゅぱっ
「ちょっとどこに出してるんですかマスター！ガントレットにかけないでください！」
え!? 顔はよくてそっちはだめなの？

３０分後――
「しかしザーメンをぶっかけても特に何の効果も
ありませんでしたね
聖杯が反応するはずなのですが」
機嫌が治ってよかった……
「うーん、だったらこうしたらいいんじゃないかな」

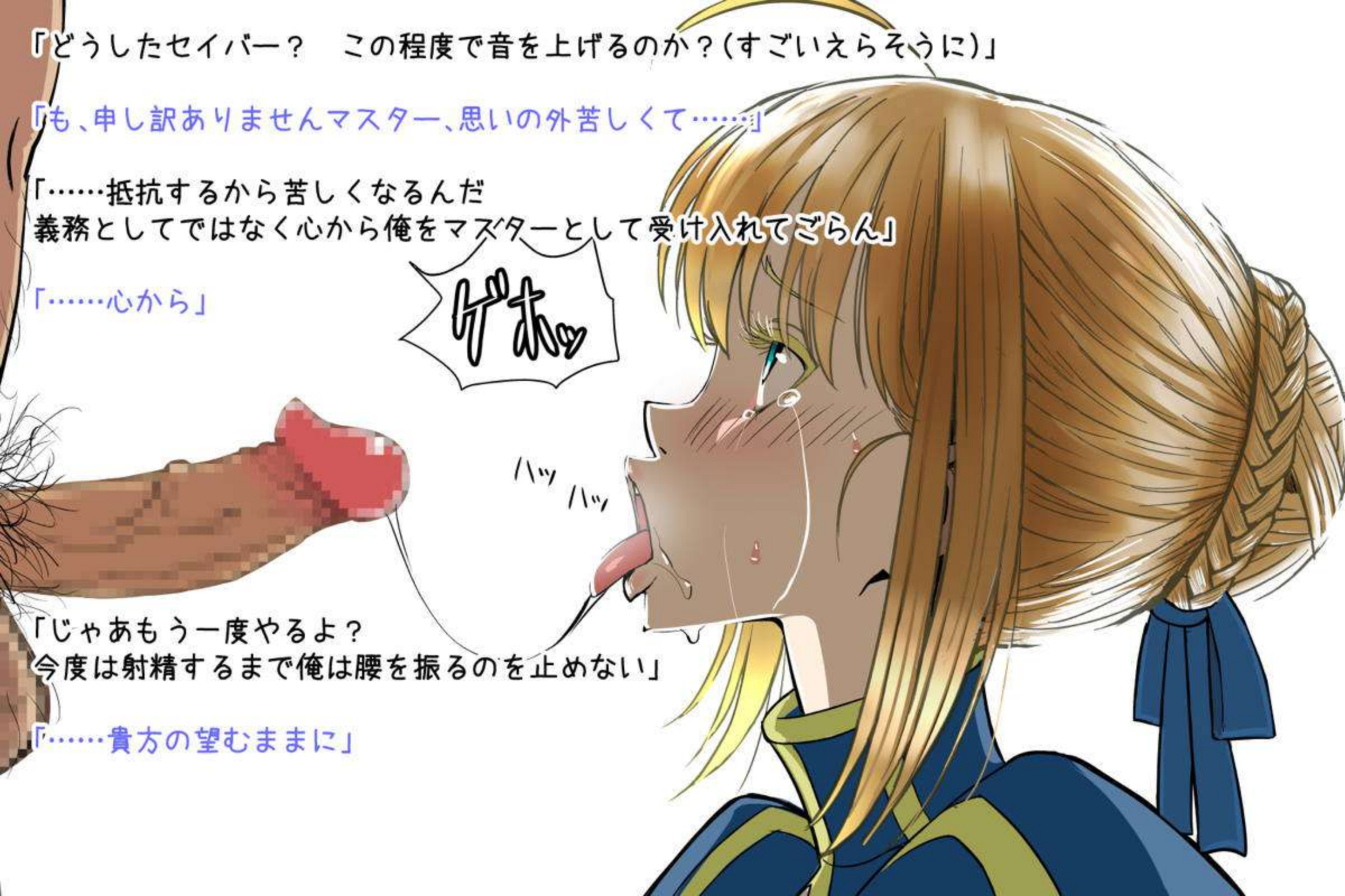

「直で飲めばいいんじゃないかな、ゴクゴクと」
「ええ、私もそう思っていたところです」
「ただ一回出しちゃったから出づらいんだよね(嘘)
また出すためには辛い試練を乗り越えてもらわないといけない」
「ええ、私は騎士を統べる王。 どんな試練も乗り越えて見せましょう」

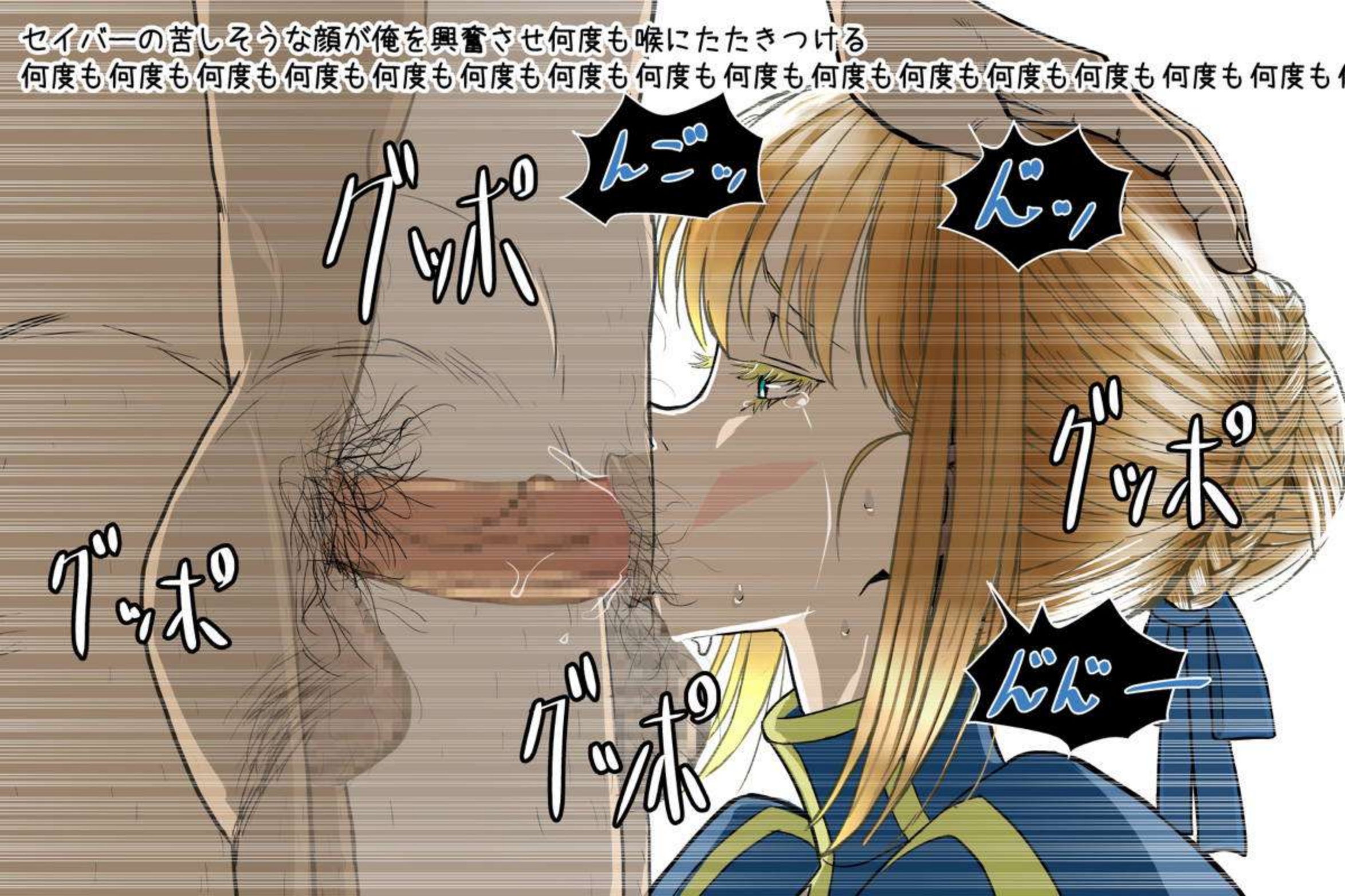
「よく言ったセイバー、……じゃあいくぞ？」
「……ん♡」
チュッ
くさい

ズンッ
!
「んんんんんんッ！！？！」


ブッ
ブッ
ブッ
んッ
ゴゴゴ
んーッ
ゴゴゴ
ど
ど

ゲグゲッ
ん
……


「どうしたセイバー？　この程度で音を上げるのか？(すごいえらそうに)」
「も、申し訳ありませんマスター、思いの外苦しくて……」
「……抵抗するから苦しくなるんだ
義務としてではなく心から俺をマスターとして受け入れてごらん」
「……心から」
ゲホッ
ハッ ハッ
「じゃあもう一度やるよ？
今度は射精するまで俺は腰を振るのを止めない」
「……貴方の望むままに」


セイバーの苦しそうな顔が俺を興奮させ何度も喉にたたきつける
何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も
グッポ
んごッ
んごッ
グッポ
グッポ
グッポ
グッポ
んんー

「いくぞセイバー！　お望みのザーメン好きなだけごちそうしてあげるからね？
粗末にしたら許さんぞ！」
「……！（そんな、覚悟がまだ……！）」
ぐッ
ジュッポ
んんッ
グッポ
ジュッポ
グッポ
んッ

「受け止めろおっ!!」
ドビュルルルル
んッ
んんんんッ!!
(……苦しい……射精、これ、いつ終わるのです?)
意識が朦朧としながらもマスターの言葉を思い出す

(……そう受け入れる、心から)
「……おおっ？　おっおっおっ！　分かる、分かるぞッ！
今俺が射精してるんじゃない、セイバーの喉の蠕動によって射精が促されているッ！
……セイバー、『道』を得たようだな、えらいぞ」
「……♡」
ゴキュッ
ゴクッゴキュッ
ゴクッ
(なんか適当に偉そうに老師っぽくしてたら
セイバーの従順度が上がった気がする！
ラッキー！
これからは試練の名のもとに
毎日セイバーをオナホ扱いやで！)

「凄まじい魔力量……体中が熱いです」
「うん、ちょっと休もうか
俺もクタクタ」
「焼けるように熱い、マスター……
何か変です、思考がまとまらない———」
ハッ
ハ

カッ

「うっ、うわあああああ！！！！！！」

二度目だこれ！

「もっとほしい……
ザーメンがまだ足りない」

「ファッ!?
どちらさんのセイバーさん？」

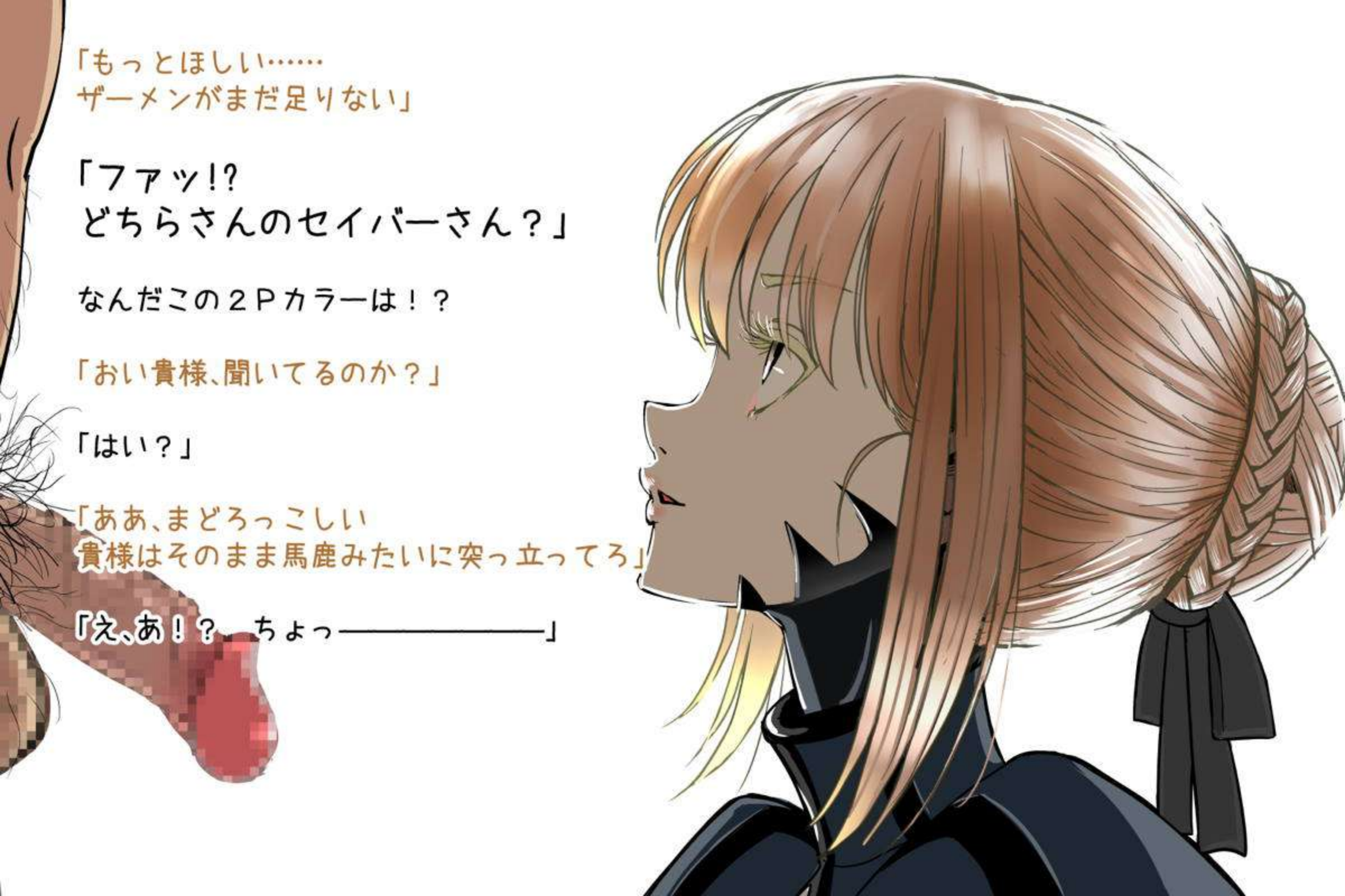
なんだこの２Ｐカラーは！？

「おい貴様、聞いてるのか？」

「はい？」

「ああ、まどろっこしい
貴様はそのまま馬鹿みたいに突っ立ってろ」

「え、あ！？　ちょっ――――――――」



「ちょっとおおおおお！！」
「……」
ぢゅっぽ
ぢゅッぽ
ガクっ
ガクッ
ぢゅッー
「あヒッ！……いやあの、出したばっかりで
敏感になってるから――――」
「って言ったそばからレロレロするの止めて！」

「あっ、あっあっあっあっ……！」
セイバーが深く咥え
俺のちんこ全身が口全体で包まれる
しかし亀頭がいじめられない束の間の安息……！
「ん……ん……」
「ああ……ずっとこのままでいたい……」
ギュッ♡
モゴ
モゴ

「あがががががががががが！　しゅいだされりゅうううう！！」
やっぱこうなりますよねえ！！！
ガク
ガク
ガク
ジュルルル
ズゾゾゾゾッ

しーん
俺はかろうじて立っている……
いや支えられて立っているだけか
精液全て吸い取られ精魂尽き果てた……
ハァ…
「なんだ貴様、もうこれだけしか出ないのか
この……役立たずが」
そりゃそうさ、俺は射精しちゃいない！
君がなけなしのザーメンを吸い出しただけ
ですから！
ていうか何ですかセイバーちゃんの変わりよう！
せっかく心から従順になってきた所だったのに！

「どうしちゃったの、セイバーちゃん！
あっ、そっか！ これもしかしてプレイの一環ってやつ？
おいおい、オプションでそんなの頼んでないぞ☆」
「……」
なんかものすごい白い目で見られてる……
何か反応してよ！
「もうこんなお遊びは終わりにしよう
さあもう一度俺をマスターって呼んでごらん！」
「立場をわきまえよ、下郎
使えぬ者ほどペラペラよく喋る」
「えっ――――――――
ドカッ

「貴様なぞただのザーメン袋にすぎない
そう自覚してわきまえることだな」
(どう、わきまえたらいいんだい、それ……?)
「……それにしても使えぬチンポだな
なんだこのヘニャチンは」
「も、もう2回も出したから無理だよ……」
チッ
グリ

「貴様の意思など関係ない」
ギラッ
!?
なんだ？ 体が……！？

「えっ!? なんだっ、これ!! いきなりちんこの勃起が止まらないっ、ひいいい!!」

「チンポだけに狂人化(バーサーカー)の術をかけ、それと同時に射精をあえて禁じた……どうだ? 気持ちよすぎて地獄だろう?」

「ひいっ、あっあああああっ!!」

「脳は快楽物質を浴びせ続けられやがて廃人化してしまうがな構いやしないだろう? モノに思考は必要か?」

ムクムクッ

「おっお願いしましゅッ！　出させて下さひッー！」

「ふん、もう出せないのではなかったか？
だが貴様の態度によっては考えてやらんでもない
私は……優しいからな」

グリ
グリ

「お願いします！　何でもしますからぁ！」

「貴様は私のマスターではなかったのか？」

「いやそんな！　俺なんて虫けらみたいなもんですから！」

「ほう虫か、手足を切り落としてザーメンを垂れ流すだけの芋虫でいいな？」

「そ、それで結構ですので射精させて下さい！」

「許す」

ドクッ

ふぅ♥

ビビッ♥

「これからは自我を捨て私のために生きるがいい
貴様を人間扱いなどせぬが私の所有物としてな
愛でてやらぬこともない、うれしいだろう？」
「……う」
「……？」
ビクッ
ビクッ

「ウガアアアアアアアアッ!!」
「なっ！」
ドサァ

ゴゴゴゴゴ
「ちょっ、貴様何をやっているのか分かっているのかッ？
今なら手足切断で済ましてやるからさっさと離せッ！」
（くっ、なんだ!? この私が全く……動けない！）
「グ……ガア…ウウウッ！」
（こいつ意識がとんでいる……？
私の術のせいで本来の力が開放され暴走しているのか？
まさかここまでだとは……）

「あっ!? 貴様ッ!
何勝手に入れて――――」
ズブッ

んおっ♥
ズンッ
パァン
（おっ!? 奥まで届いて……）

「ふんッ、全然大したことないな
こんな粗チンで満足させられるとでも？」

パン
パン
パン
ん♥
ん♥
んん♥
ん♥
ん♥
ギシッ
ギシッ
パン
パン
(……なんて力強いチンポ
この私が気持ちよくさせられている……？)

「フンッ、無様に腰を振りおって、そ、そんなに気持ちいいか？
私は不快感しか感じないがなッ、……アッ♡
こんな……ことをしてただで済むと思うなよッ！
この虫がッ！　……ッ♡」
ハッ
ハッ
ギシッ
ジュプッ
ズプッ
ジュプッ
「フッ、フウッ……！」
「……お、おい貴様ッこのまま中に出すつもりでは無いだろうな……？
そんなことッ……許されるはずが……！」
ズプッ
ギシ
ギシ
ギシ

ドビュッ
ビュービュルルル
おッ♥
あ…あ♥
おおッ♥
(そんな……こんなカづくでこの私がモノにされるなんて
ありえるはずがッ……♡)

「殺す……殺してやる……」
……あれ？　俺今まで一体何してたっけ？　……はて
なんで俺、黒セイバーちゃん押して倒してるの？
「ハア……ハア……」
ていうか何か――――――「可愛い……」
「なッ!!」
ハー
ハー

ポン☆
「あ、戻った!?」

もうこんな時間か……

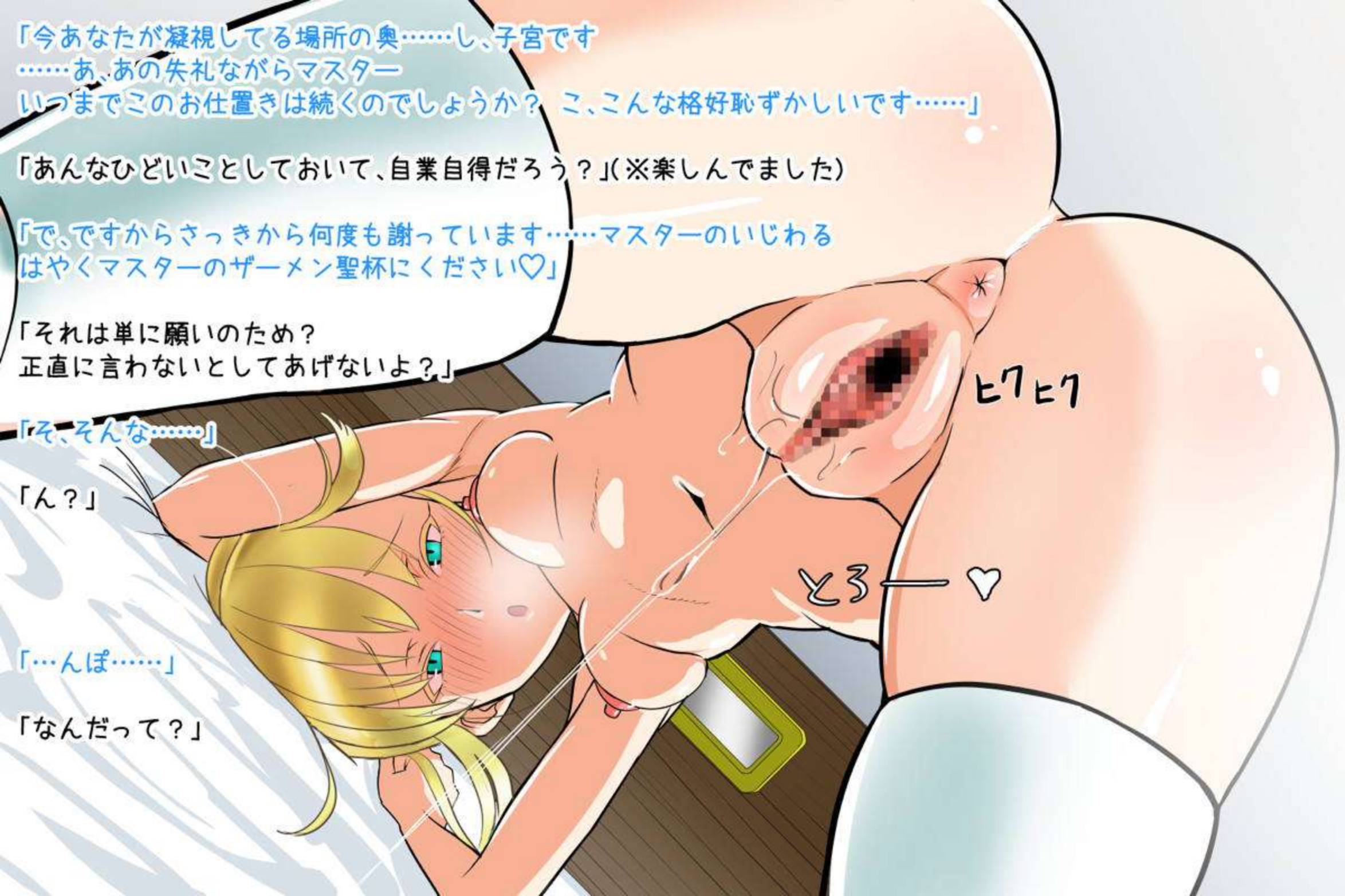
「それでさっきのはどういうことなんだい？」

「私もよく覚えていませんが……マスターのザーメンの魔力が強力すぎて
直接飲むことで理性を失い、内なる自分が発露したのでしょうか……
とても認めたくない事実ですが」

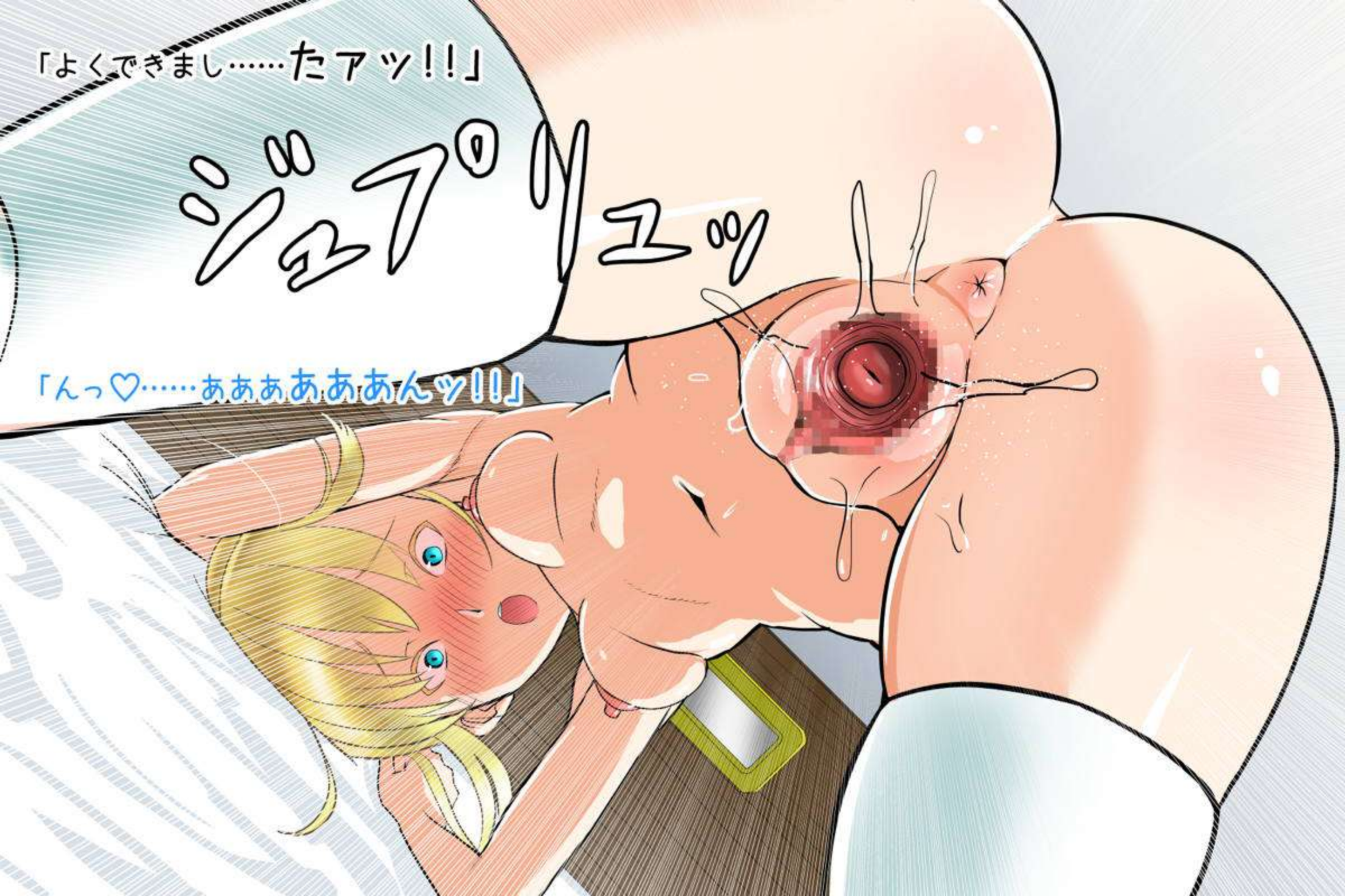
(……酒飲むと全然別人になる、あんな感じか？う一ん、だからってあんな色違いになるかね
しかしとんでもないことが起こりすぎてすっかり彼女の言うことを信じてしまった自分がいる……)

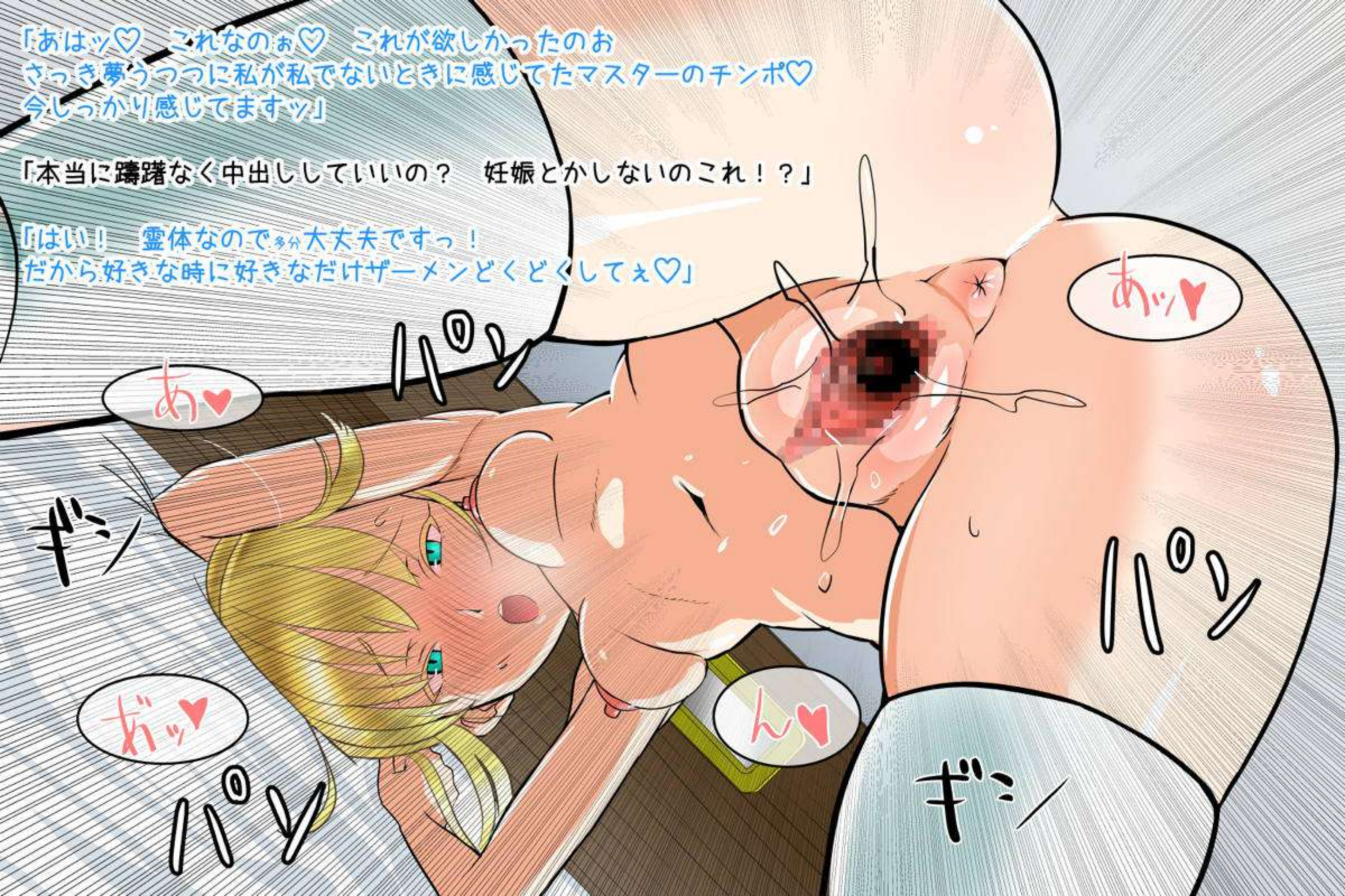
「ですがマスターの言葉と聖杯の正しい場所への射精で我を取り戻したようです……」

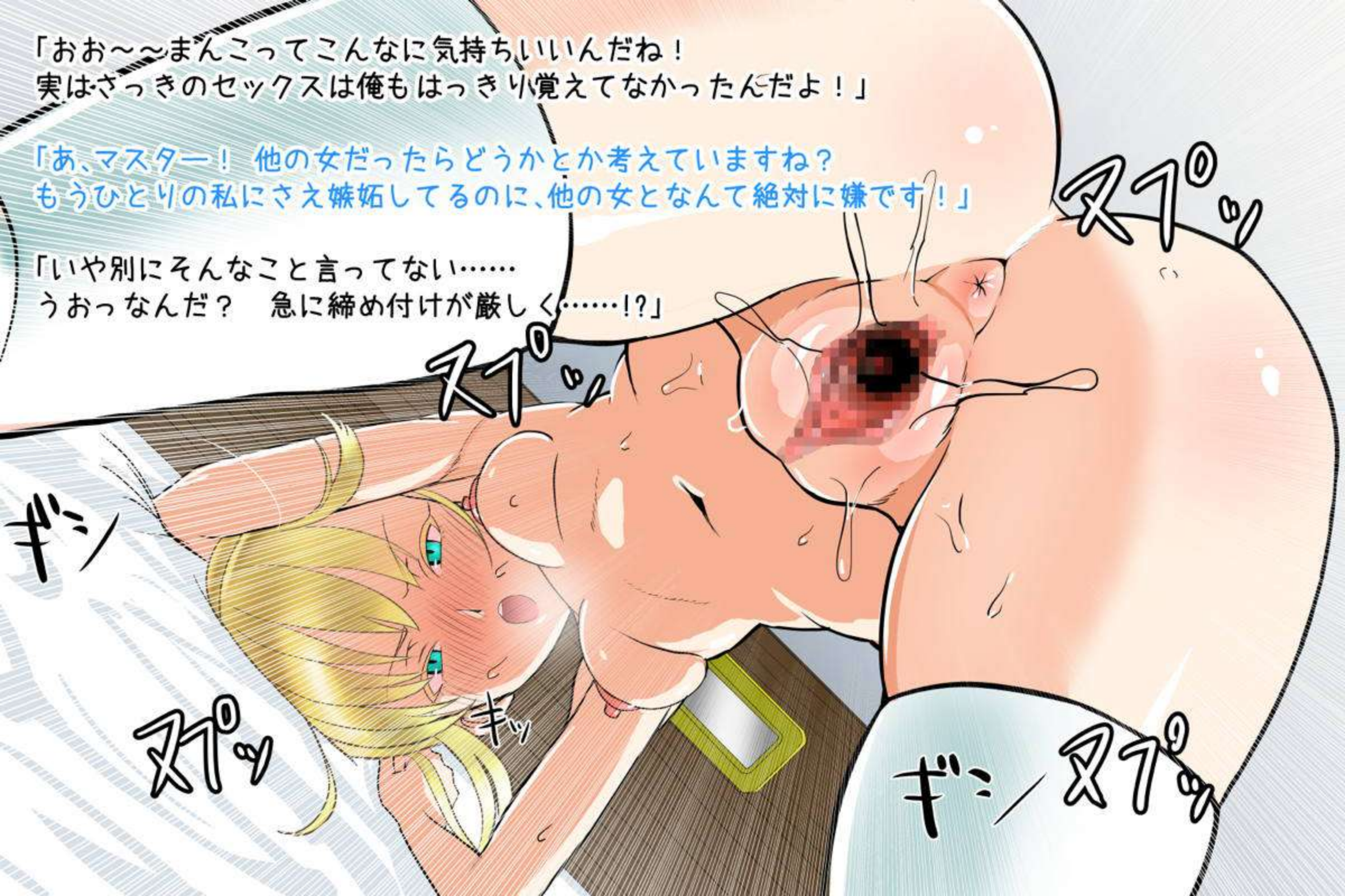
「聖杯の……正しい場所？　って、もしかして……」


「今あなたが凝視してる場所の奥……し、子宮です
……あ、あの失礼ながらマスター
いつまでこのお仕置きは続くのでしょうか？　こ、こんな格好恥ずかしいです……」
「あんなひどいことしておいて、自業自得だろう？」(※楽しんでました)
「で、ですからさっきから何度も謝っています……マスターのいじわる
はやくマスターのザーメン聖杯にください♡」
「それは単に願いのため？
正直に言わないとしてあげないよ？」
「そ、そんな……」
「ん？」
「…んぽ……」
「なんだって？」
ヒクヒク
とろーー♡

「ちんぽぉ！　ちんぽ欲しいの!!
マスターとの初めてがあんなのなんて絶対嫌です！
朧気にしか覚えてないからもっとはっきりとマスターを感じたい！
膣肉を無理矢理かき分けて子宮内で直接射精してえッ!!」
ピュッ
カー


「よくできまし……たァッ!!」
ジュプッ
「んっ♡……あぁぁあああんッ!!」


「あはッ♡　これなのぉ♡　これが欲しかったのお
さっき夢うつつに私が私でないときに感じてたマスターのチンポ♡
今しっかり感じてますッ」
「本当に躊躇なく中出ししていいの？　妊娠とかしないのこれ！？」
「はい！　霊体なので多分大丈夫ですっ！
だから好きな時に好きなだけザーメンどくどくしてぇ♡」
あッ♥
あ♥
ギシ
パン
ぉッ♥
パン
ん♥
ギシ
パン


「おお～～まんこってこんなに気持ちいいんだね！
実はさっきのセックスは俺もはっきり覚えてなかったんだよ！」
「あ、マスター！ 他の女だったらどうかとか考えていますね？
もうひとりの私にさえ嫉妬してるのに、他の女となんて絶対に嫌です！」
「いや別にそんなこと言ってない……
うおっなんだ？ 急に締め付けが厳しく……!?」
スプッ
スプッ
ギシ
スプッ
キッ
ギシ
スプッ

「おおっ出るッ射精(だ)すッ!!」
ドクッ
ッ♥
あ♥
♥
ああ―♥
私のもの なんですからあ♥

「ハアッ、ハア……」
（お仕置きしたのに独占欲爆発でイマイチ反省してないな……
私のものどうとか言ってるし、ほんとに元のセイバーに戻ったんだよな……？）
「やん♡　せっかく聖杯に注いでもらったザーメン
溢れちゃって台無しです♡
ねえ、マスターもう一回お願い……」
ハー
ハー

「ひっ……いぎいいいッ
出したばっかりなのにさっきより大きくてしゅごいいい♡」
「君に何かされて以来、力がみなぎるぜ！
セイバーだってまだ物欲しそうに膣がうごめいてるけど？
今すぐにでも射精してしまいそうだ」
「そっ、そんな早く射精しちゃ嫌です♡」
「中に出してほしいんじゃないの、セイバー？」
「私のまんこ散々ほじくり回したあげく最後に吐き捨てるように射精されたいんです♡
ああ、何を言ってるんでしょう、私……」
ミチ
ミチ♥ミチィ

「肉便器みたいに？
オラァッ、セイバー
オナホみたいに？
これで満足なのかッ！」
「はひッ♡ 私はマスターのものですからッ、あおおっ♡」
「ついさっき独占欲むき出しにしてた奴が言うことか？
セイバーだって俺は私のものとか思ってるんだろ？」
「ごめんなひゃあい もう二度と言いません♡」
「謝らなくていいんだよぉ！
だって俺はセイバーのこと大好きなんだから！
どっちのものとかないからさぁ！」
おッ
おおッ
あ♡
あッ イッ
ボコッ
ボコッ
ズッポ
ズッポ
ズッポ

「ほんと？　うれしいです、マスター♡
私も好き、だーい好き♡」
「あれ!?　黒セイバーちゃんがそんなこと
言うなんて……ビックリだよ！」
ぬっちゃ♡
ぐゅっちゅ
ぐゅっちゅ
ぐゅっちゅ♡

「なっ貴様ッ
私がそんな事言うわけないだろう！」
「いやいや逆逆(笑)」
ギッ

「ああもうどっちでもいいですぅ♡
もう王として男として生きるのに疲れた私に
はやくとどめを刺してくだひゃいッ♡」

スポッ

あッ♡

フッフッ

あッ♡

あぁッ♡

スポッ♡

ジュッポ♡

あー♡

ジュッポ

スポッ

俺のッ女になれッ

ドクッ

おッ？おお～

ドクドクン♡

ぶりましゅッ♡

ビュルルル♡ビュッビュー♡ビュクルルル♡

おほおッ♡

「はぁはぁ、こんなにいっぱい出したら絶対、絶対妊娠しちゃいます♡」
「えっえっ？　妊娠しないって言ったよね、言ったよね？」
フー
フー
ゴボォ

「これで聖杯は満たされました
今、ようやく私の悲願が叶う」

「国が滅びたことをなかったことにする、だっけ？」

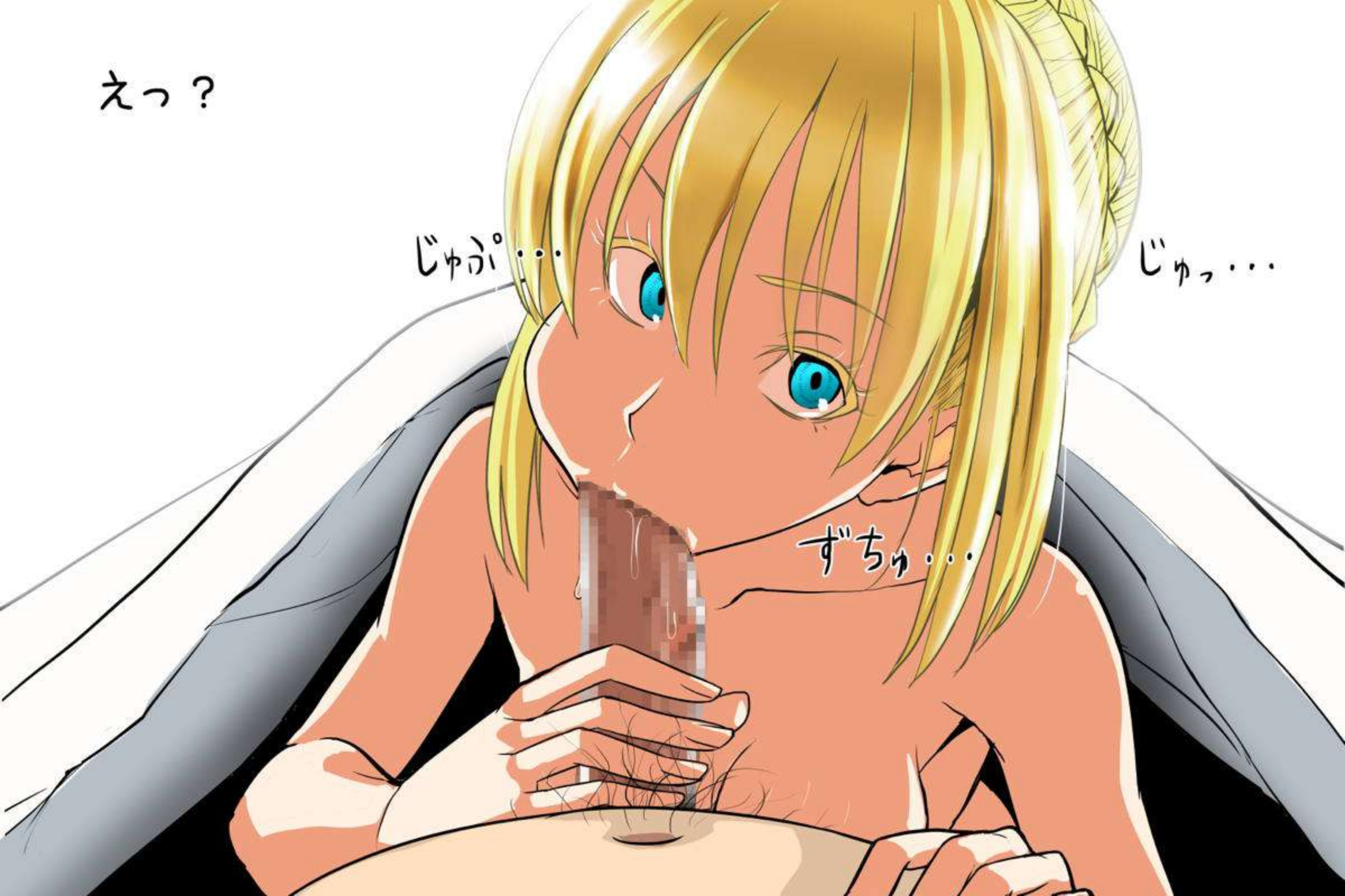
「そうです。私さえ王にならなければ
エクスカリバーさえ抜かなければ国は滅びなかったでしょう
それをやり直すのです」

（ん？　エクスカリバー？　それって……）

「マスター、貴方の望みはなんですか？
貴方の願いも叶えることができるのですよ」

「え、俺？　そうだな、そりゃもちろん――――」

ん……


えっ？
じゅぷ・・・
じゅっ・・・
ずちゅ・・・

どこですかここ！？

「おはようございますあなた♡
ようやく起きましたね」
「あのここ、どこ？　なにがあったの!?」
「ここは私の城
あなたから見れば過去の、私が生きた時代
しかし聖杯への願いによって
歴史を変えられた新しい世界」
「そういえば君の正体って――――――」

「ぬおあああああっ！」
ジュッジュ――ッ
ジュルルルッ
ズゾゾッ
ズズズッ

「そっ、そんなつんつんしたら――――」
つんつん♡
っっっん♪
にちゅ…
じゅるる

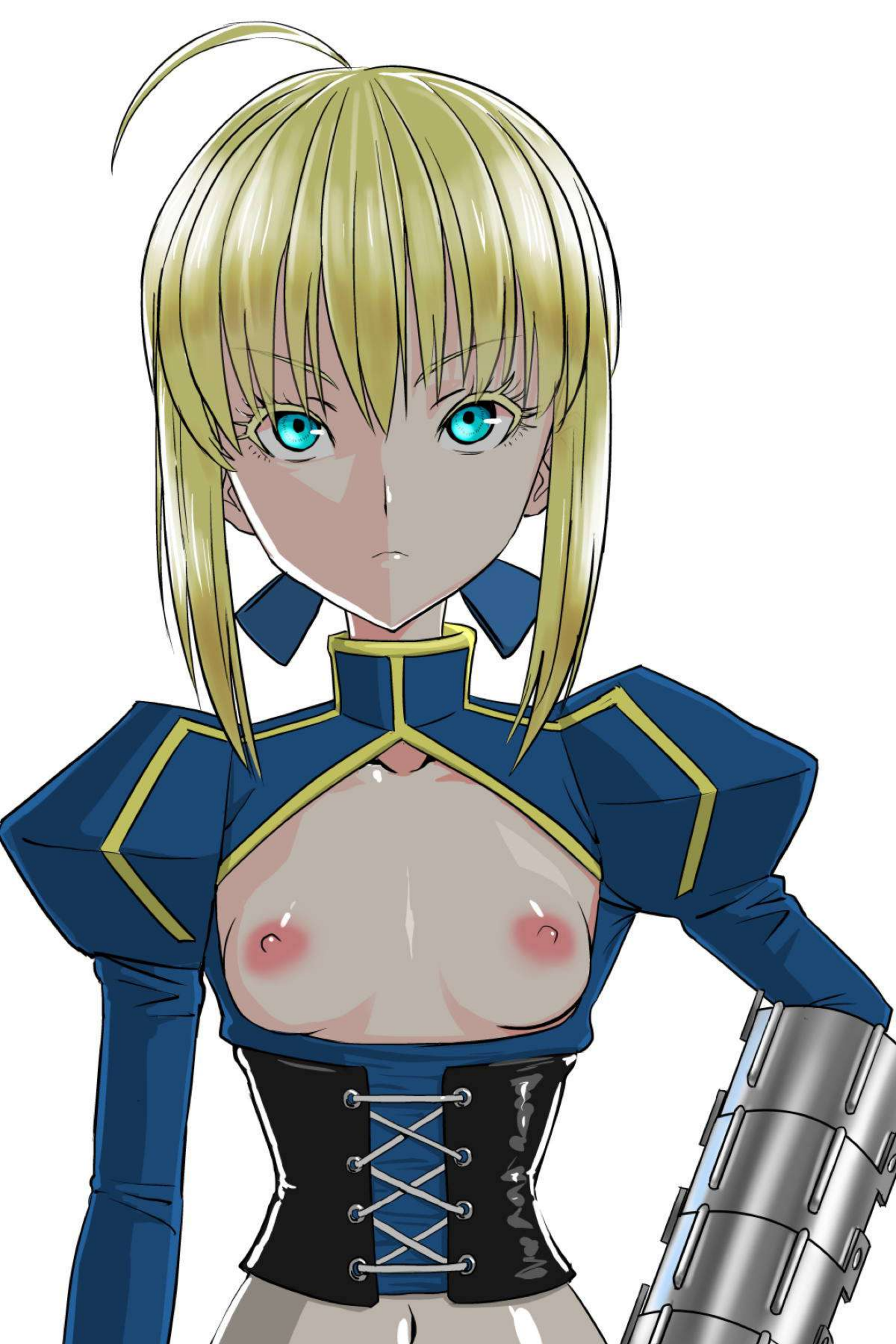
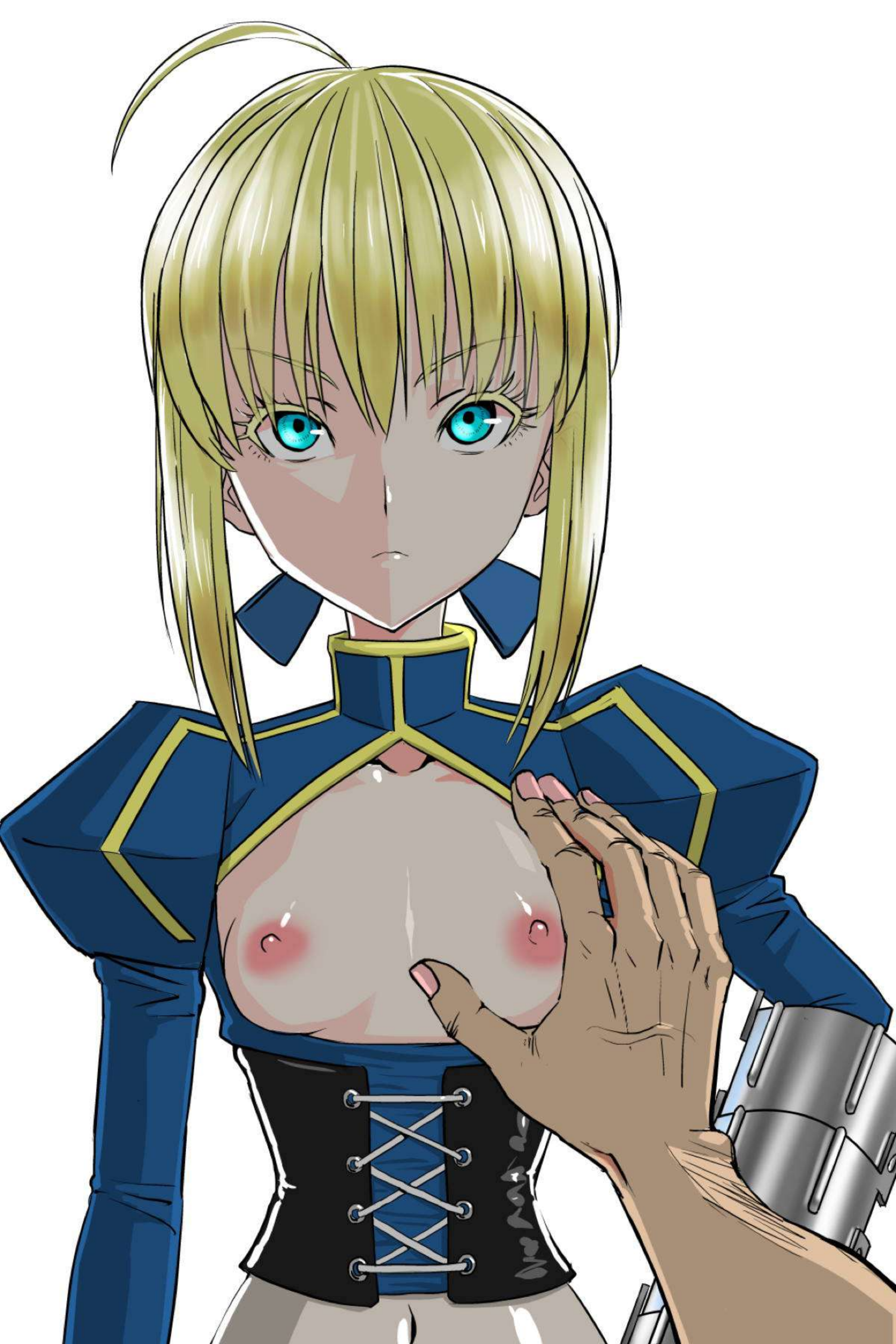
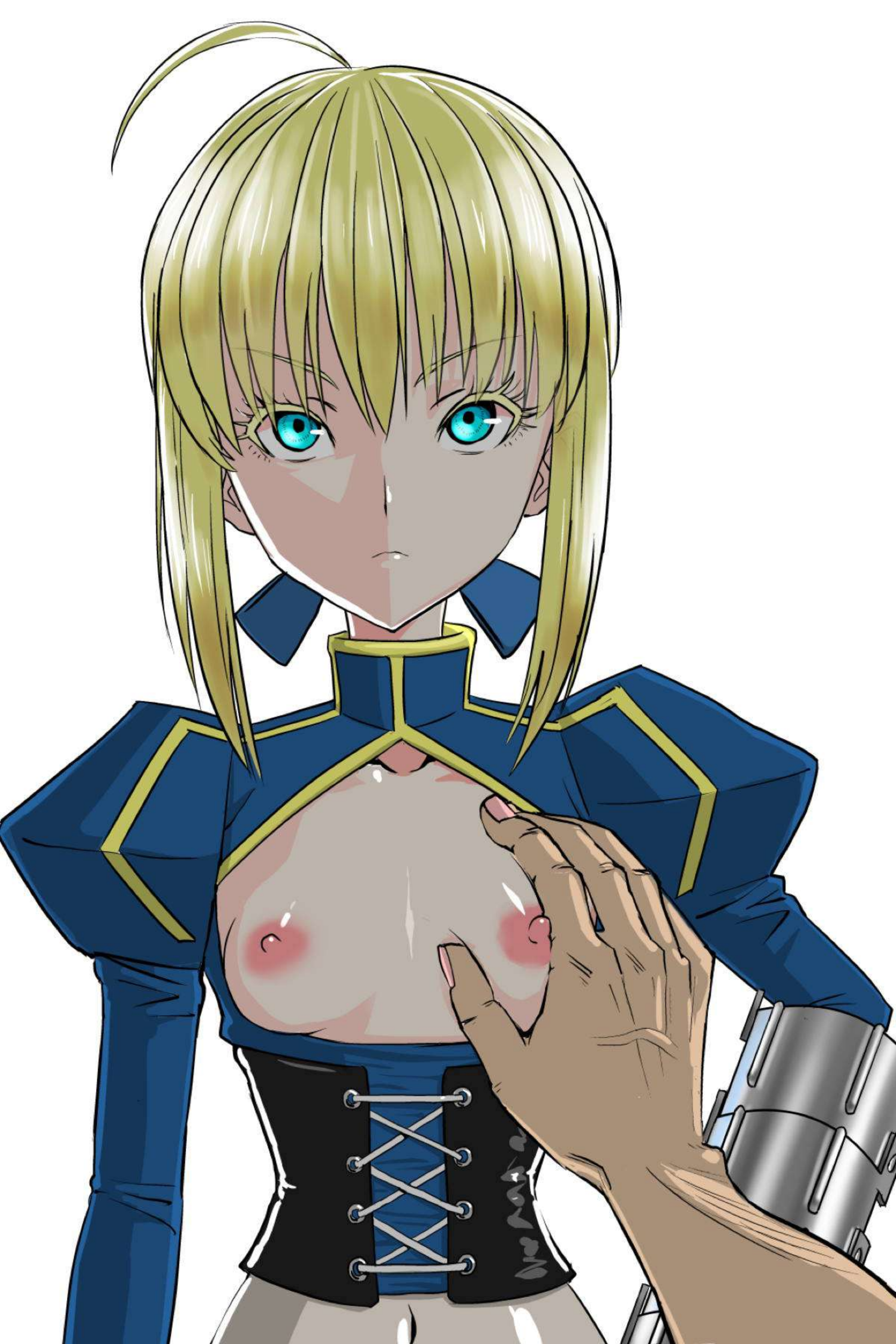
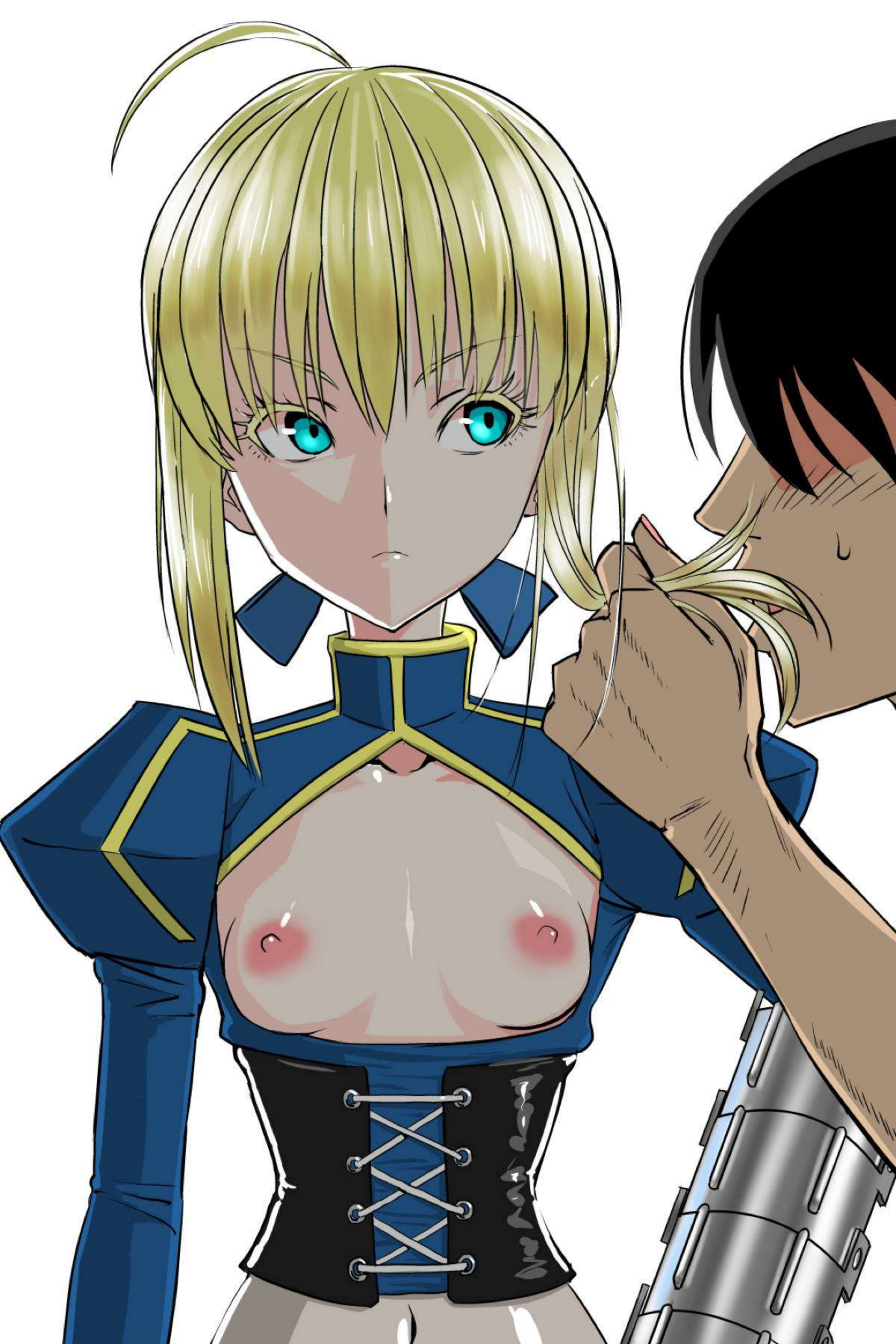
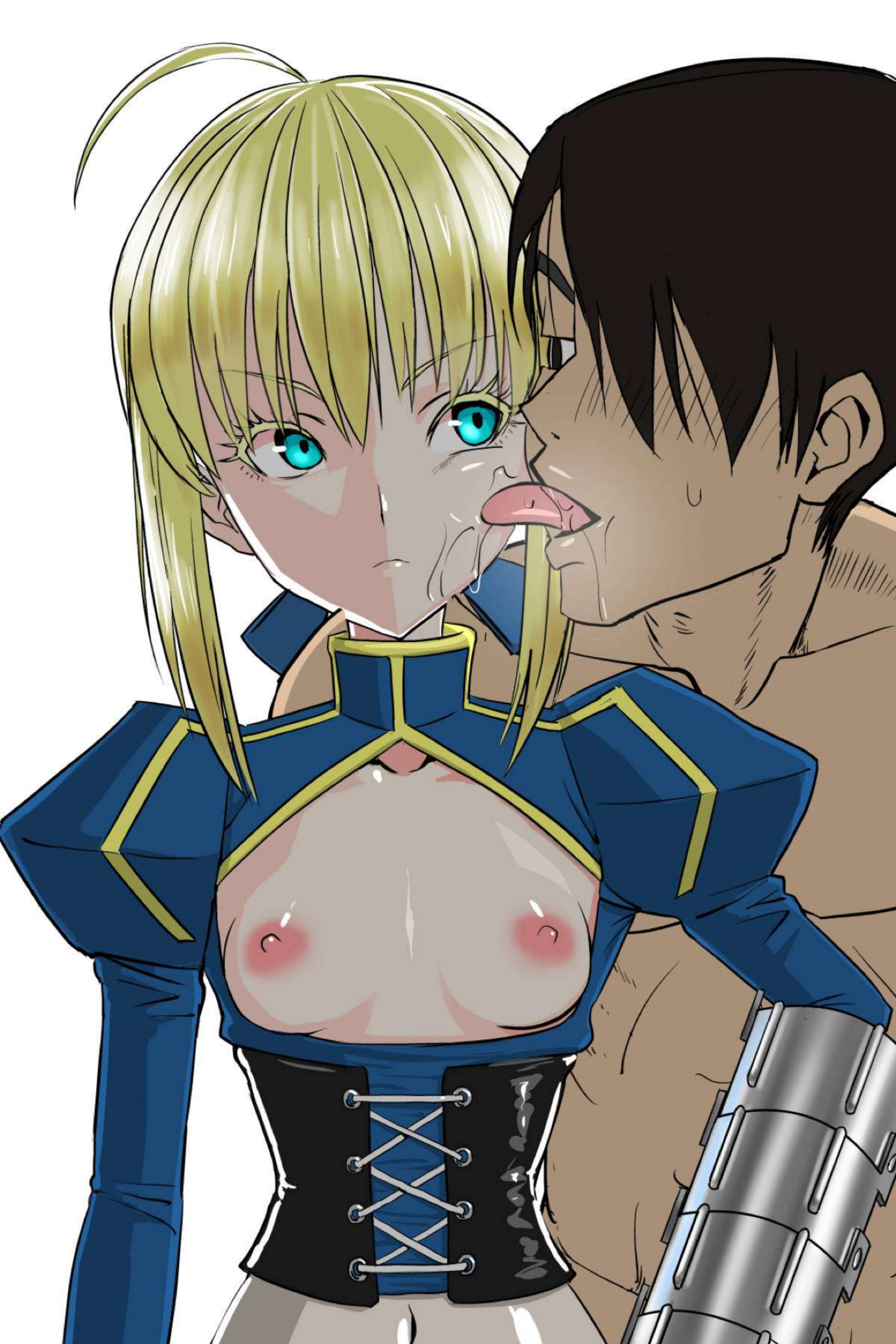
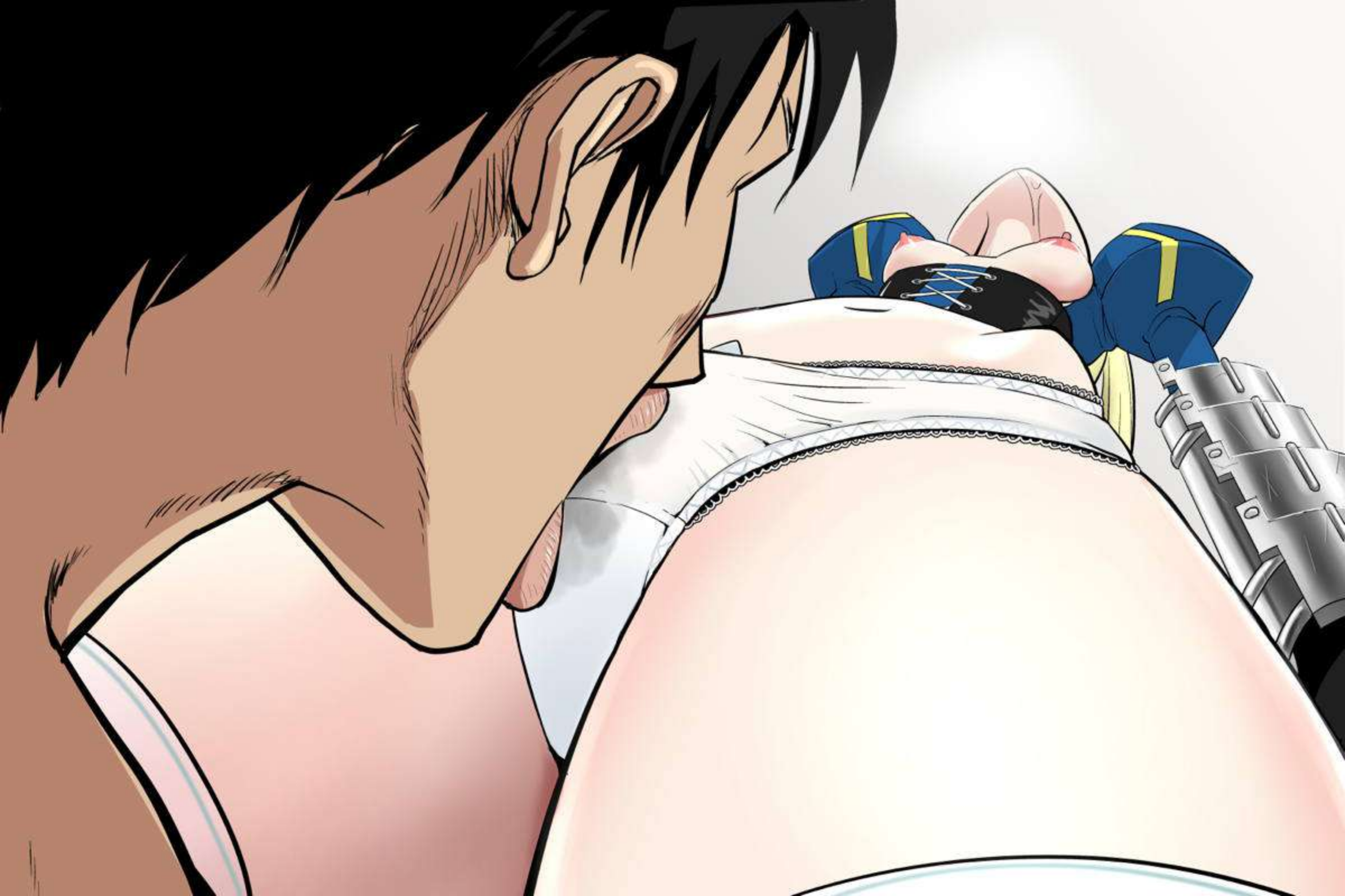
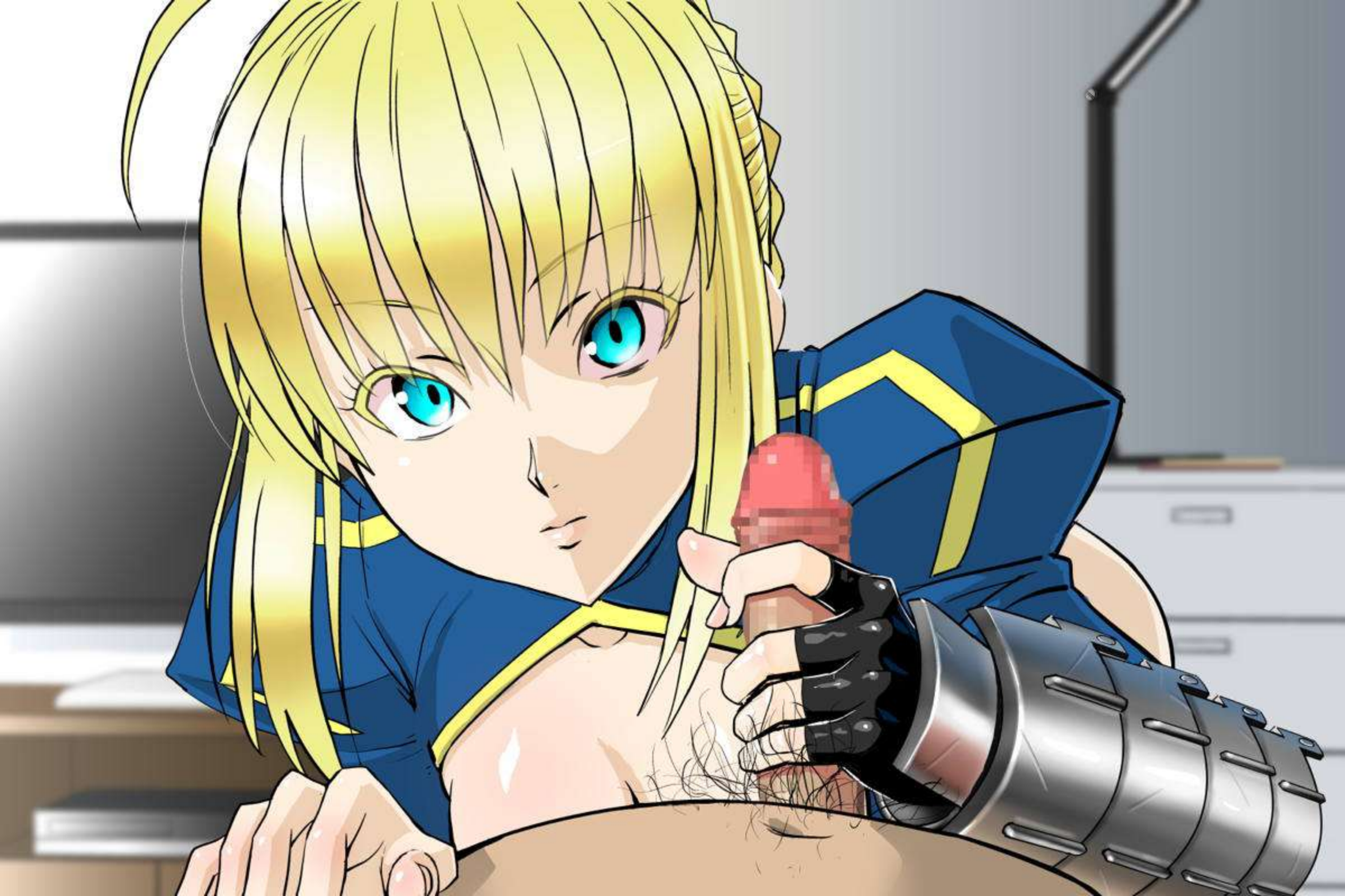
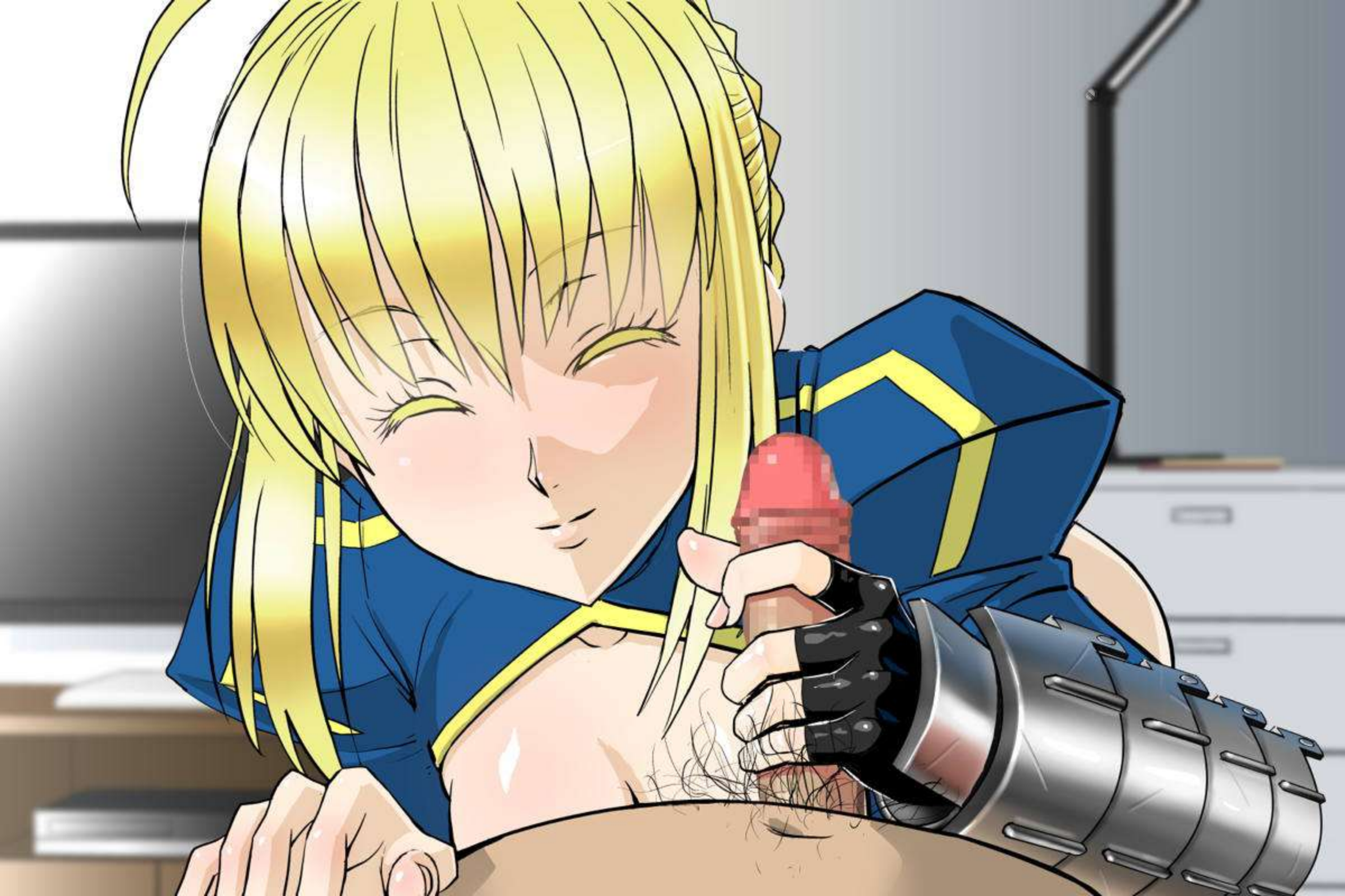
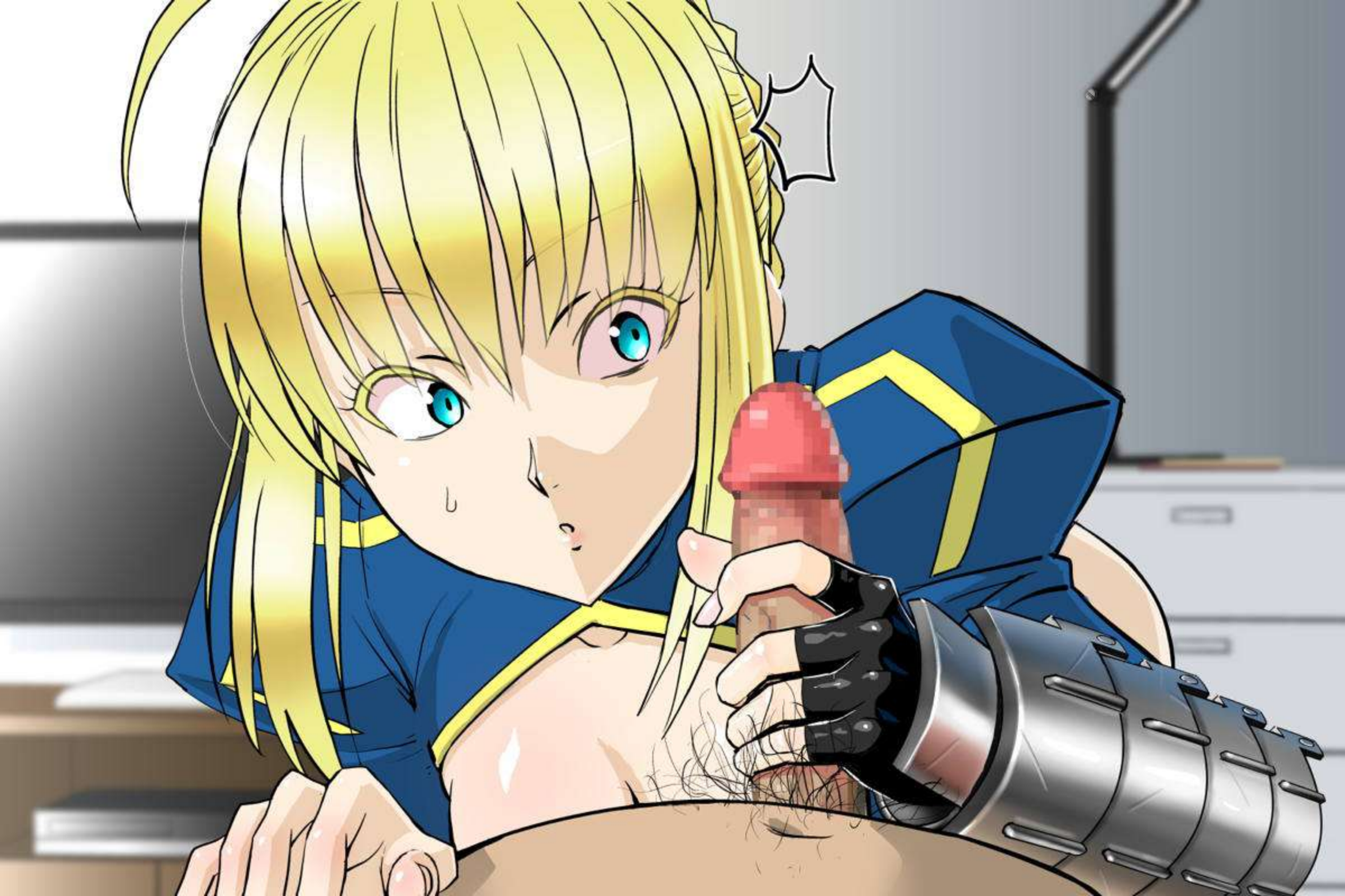
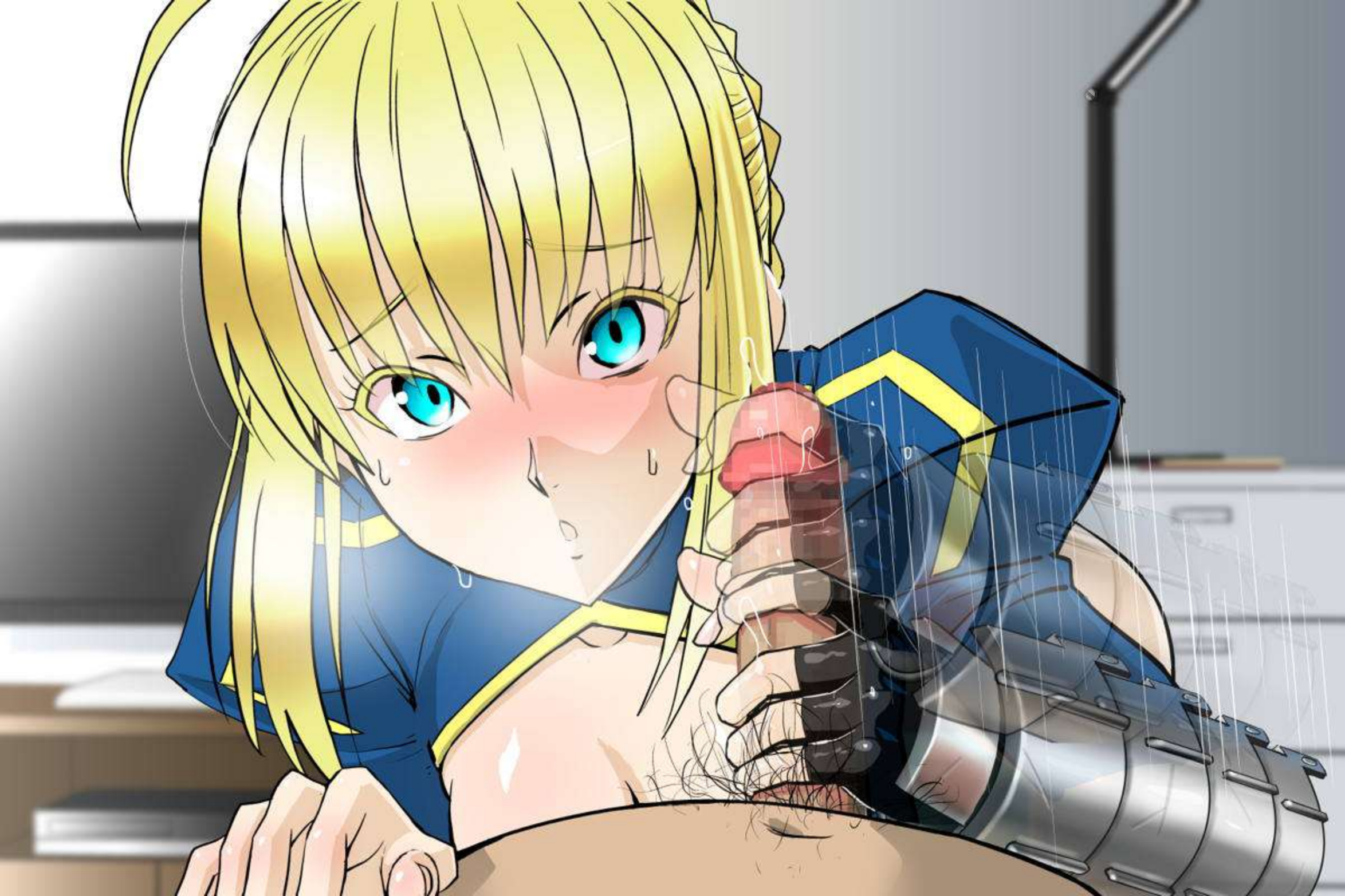
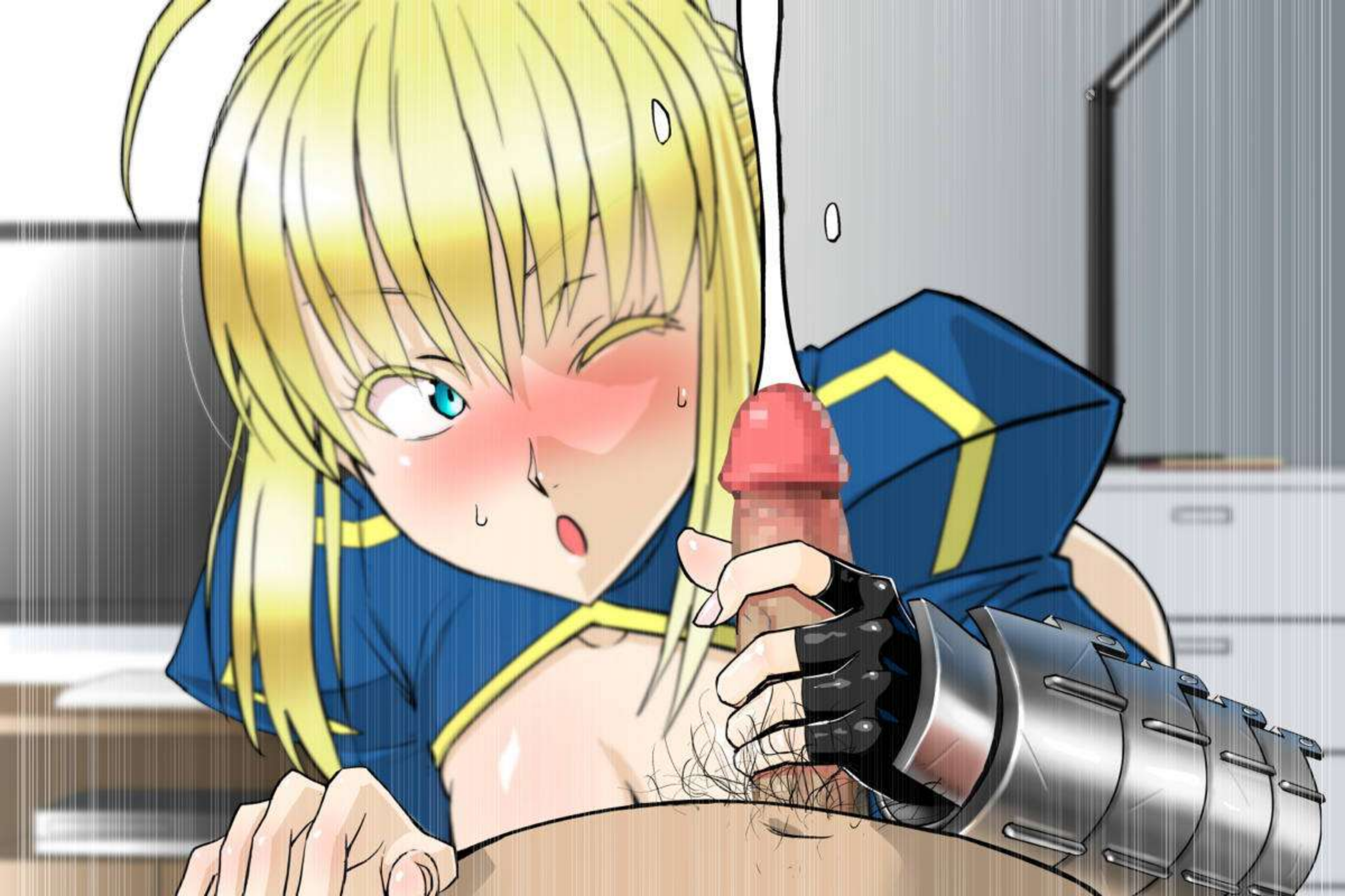
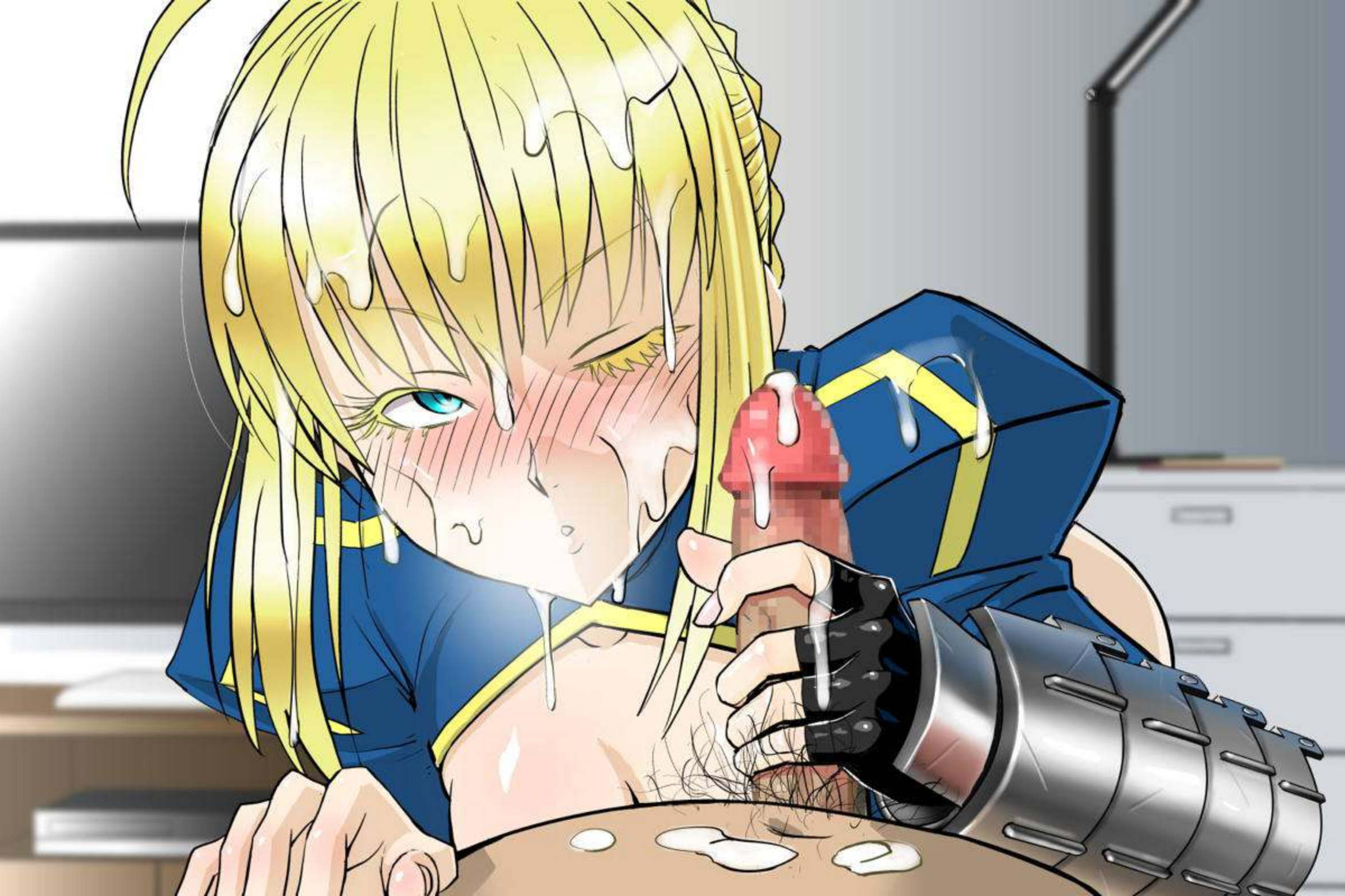
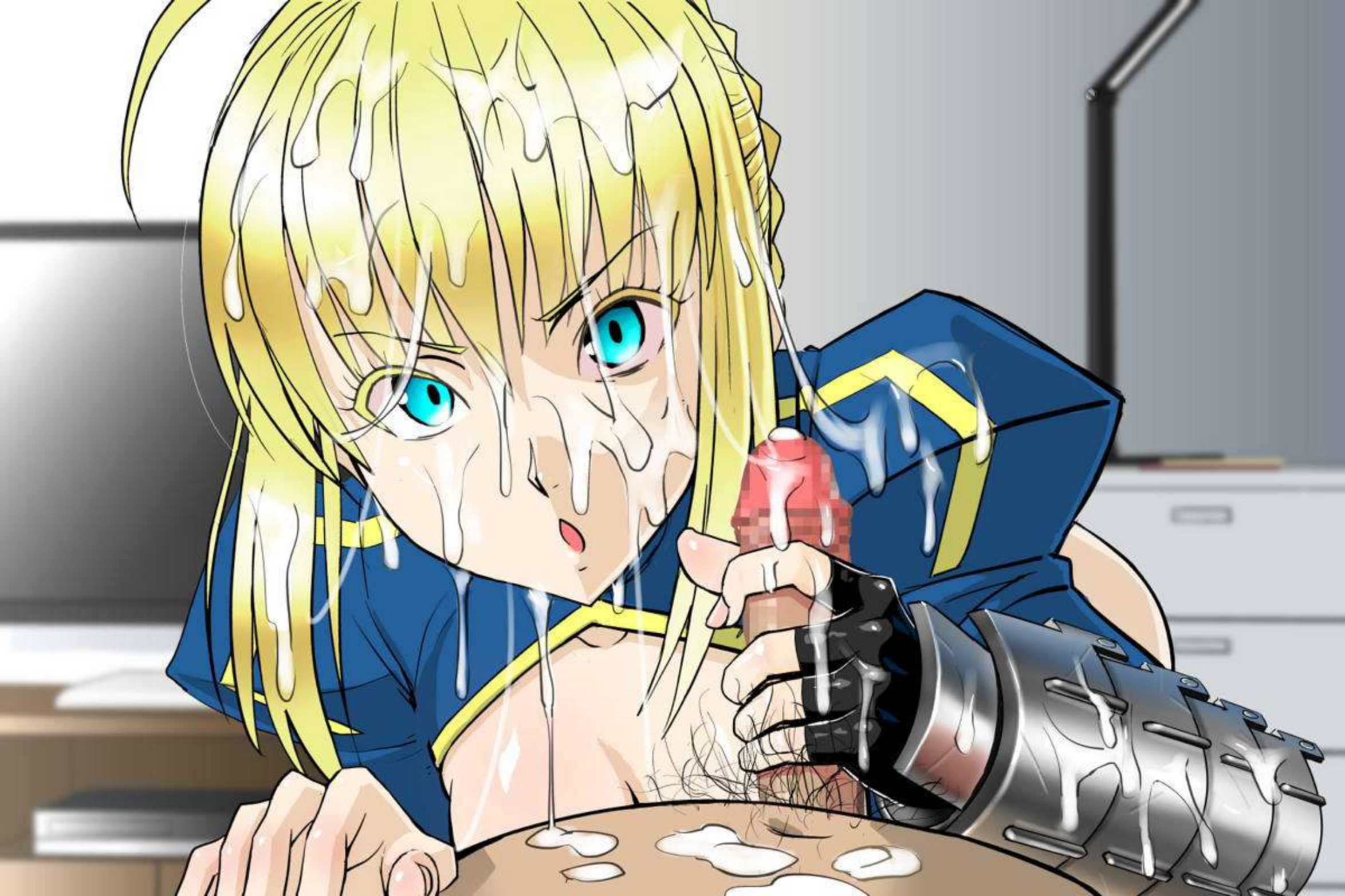
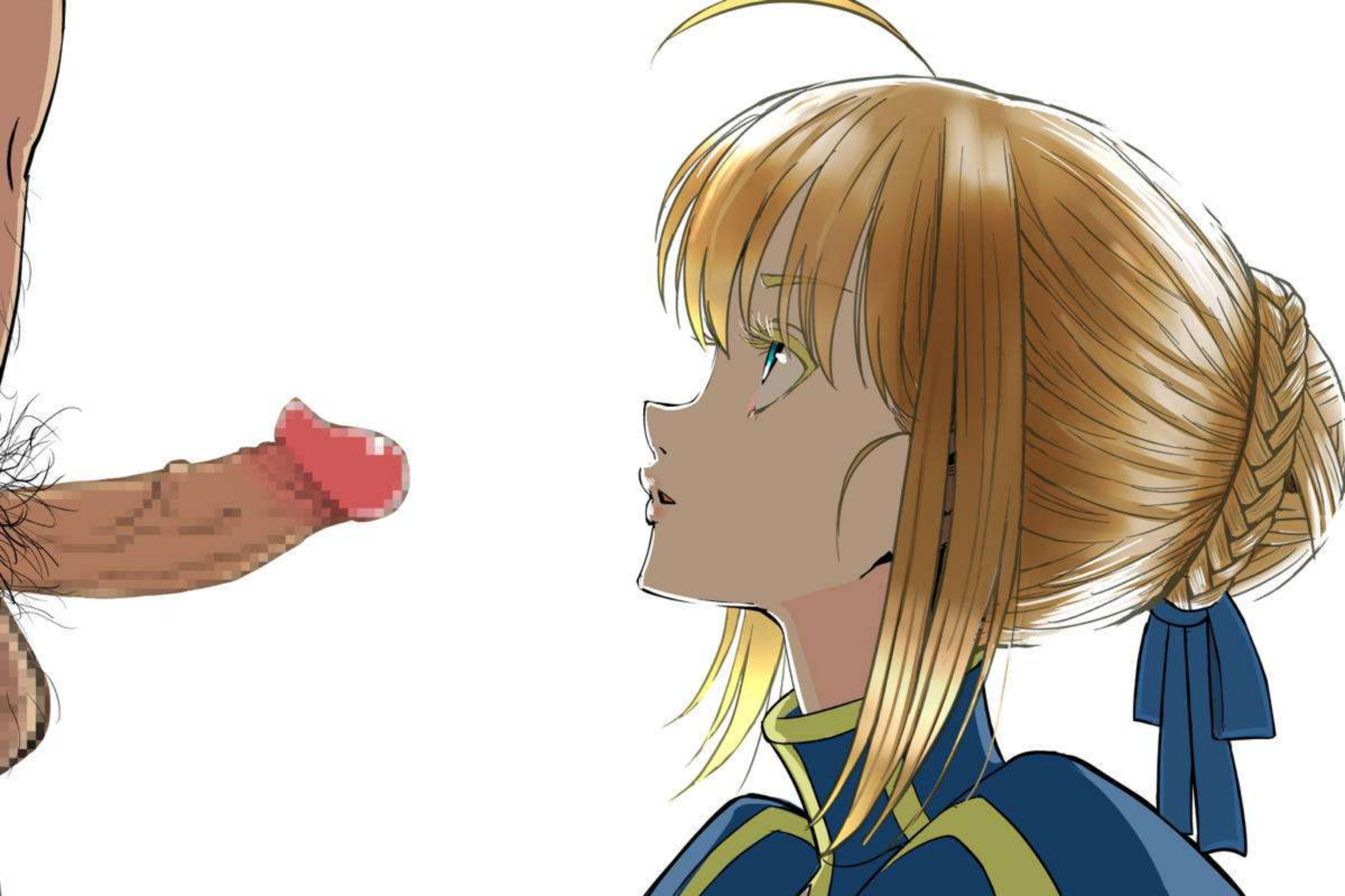
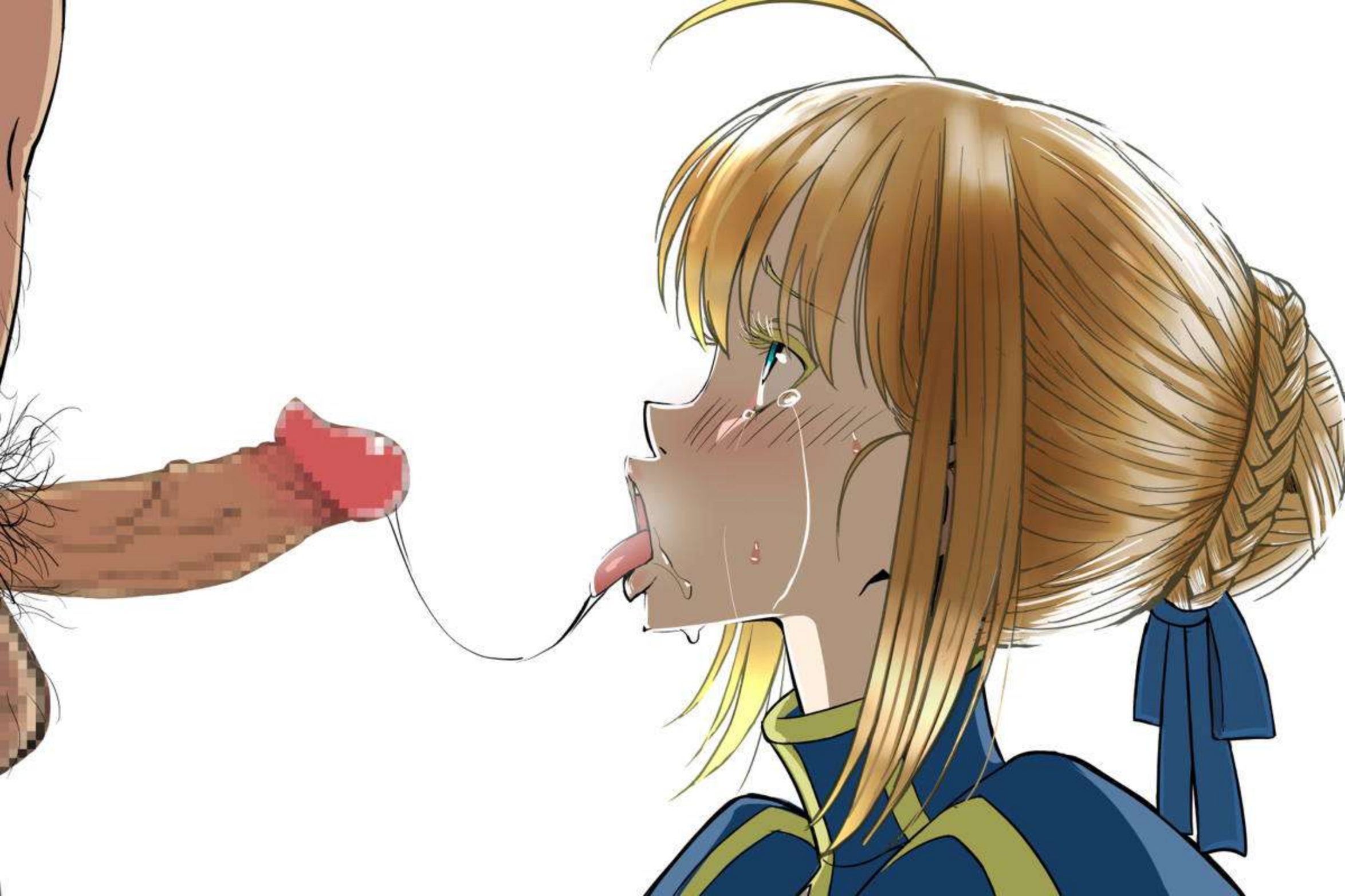
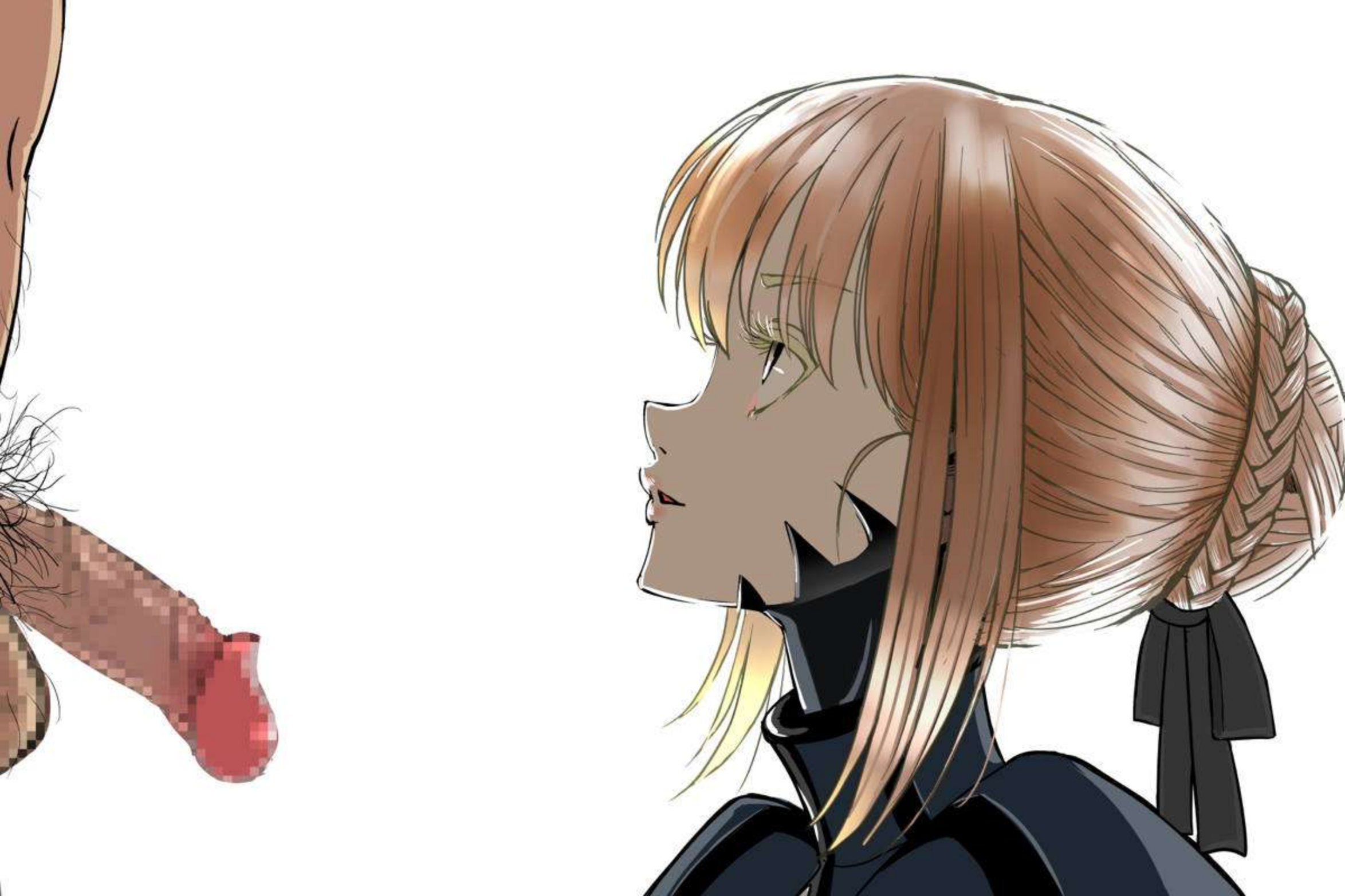
「出ちゃうからぁああ!!」
ドクッ♥
ドクドクドクッ
ん…ん
ん…♡

「おほお……おおおおおお……」
ビュー
ビュルルル
じ――――♡
フー
フー
ビュクービュルルル
ビュ――…

静寂を帯びた部屋に響き渡るセイバーの嚥下音
こぼした精液も残らず舐め取っていく――――

「全部……飲みまひた…♡」
褒めてほしそうな子犬のような顔をするセイバー
「あ、うん……ありがとう
すごい、すっきりしましたです」
「えへへ♡　これからは毎日こうやって
起こしてあげますからね♡
妻の責務として
王のためにはこれぐらい当然です♡」
「えっ？　王様って君だよね？(妻!?)」
「いいえ、あなたです
ここはそういう世界なんです」
(どういう世界だよ！)
「ですから正確にはこの城は
あなたの城と言うべきですね」

「この国にとって不幸は女である私がエクスカリバーを引き抜いて
王を継いだことから始まりました
私はそれをやり直したかったのです、つまり聖剣を引き抜きし者をもっとふさわしい者への継承を」
「ちょっ、おいまさか———」
「エクスカリバーを引き抜いたのはあなた
聖杯によってそのように歴史を変えられた
世界なのです」
(王って世襲じゃなくていいのかよ！)
「いや君自身が王としてもう一度
やり直したいと思わないの？」

「そんないじわるなこと言わないで下さい
あなたが私を女にしたくせに♡」
「あ、はい。すいません」
「それと私のことは真名で呼んで欲しいです
アルトリアと」
「アル…トリア」
「これからも末永くよろしくお願いしますね
新たなるアーサー王よ、そして私の旦那様♡」
……なんかえらいことになったがまあいいか
俺の望みもまた彼女、アルトリアと一緒にいることなのだから――――――
END

9
2018